吉　塚　2

－ 吉塚遺跡群第２次調査の報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第464集

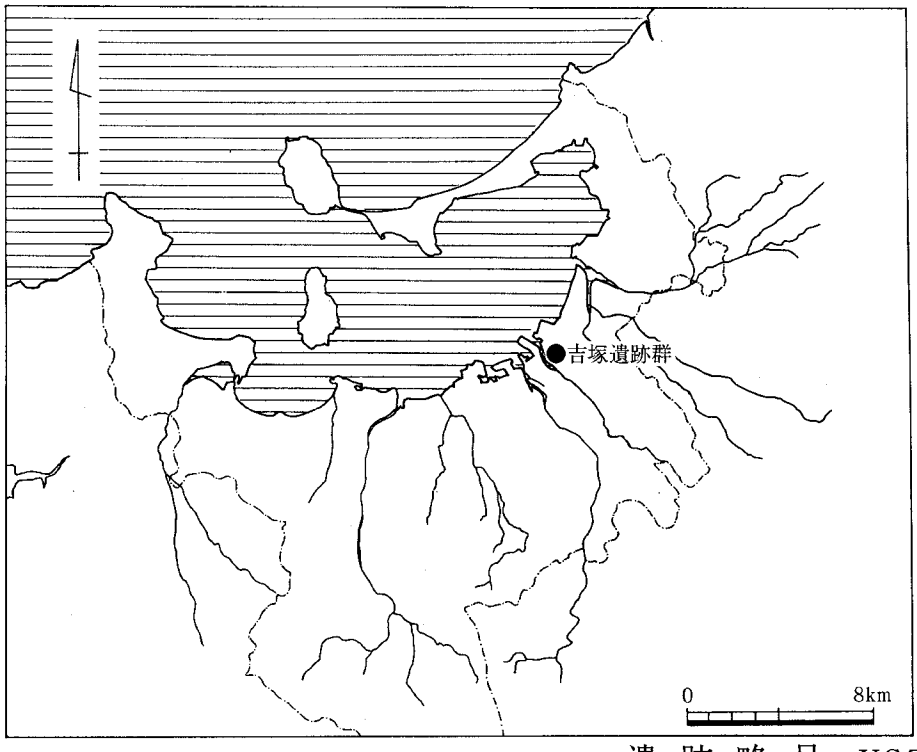
1996

福岡市教育委員会

吉塚（よしづか） 2

－ 吉塚（よしづか）遺跡群第２次調査の報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第464集



遺跡略号　YSZ 2
遺跡調査番号　９４４７

１９９６
福岡市教育委員会

序

福岡市は地理的に大陸に近く、古くより交流の場としての役割を果たしており、市内に豊富に眠る埋蔵文化財は、その足跡を示す無言の証言者とも言えます。今なお近代都市として膨張を続ける福岡市のなかで、都市整備とこれら埋蔵文化財の保護を両立させ、両者が共存する歴史豊かな住みよい街をつくり、これを子々孫々に伝えていくことが我々の責務であると言えます。

福岡市教育委員会では埋蔵文化財を保護するとともに、開発によって破壊される場合には事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。本書は住宅ビル建設にともなって実施した、吉塚遺跡群第2次調査の成果について報告するものです。

調査に際し、快くご理解とご協力を頂いた森俊子様をはじめ、地域の皆様方や調査に関係された方々に対し、深く感謝申し上げるとともに、この報告書が地域の皆様に幅広く活用され、文化財保護のご理解を深める一助とならんことを願います。

平成8年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾花　剛

例　言

1．本書は平成６年11月７日から12月13日にかけて福岡市教育委員会が行った、博多区堅粕４丁目16-18 所在の吉塚遺跡群第２次発掘調査の報告書である。
2．発掘調査は、民間宅地開発に伴う事前の受託調査として実施した。
3．調査で検出した遺構の番号は、遺構の性格を問わず発見順に与えた。また、遺構の性格を示す記号としてＳＡ（柵列）、ＳＢ（掘立柱建物）、ＳＣ（竪穴住居跡）、ＳＤ（溝）、ＳＥ（井戸）、ＳＫ（土坑）を用いた。
4．本書に使用した図の作製には吉武学（福岡市教育委員会）が主としてあたり、田中克子、正林真由美の助力を得た。
5．本書に使用した図の製図は吉武、田中、太田富美子、大神真理子が行った。
6．本書に使用した写真の撮影は吉武が行った。
7．本書に使用した方位は全て磁北である。
8．本書の執筆・編集は吉武が行った。
9．本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

遺跡調査番号	９４４７		遺跡略号	ＹＳＺ　２	
調査地地籍	福岡市博多区堅粕４丁目16-18		分布地図番号		
開発面積	1,114.03㎡	調査対象面積	600㎡	調査面積	337㎡
調査期間	1994（平成６）年11月７日～12月13日				

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに……1
　1．調査に至る経過……1
　2．調査の組織……1

Ⅱ．遺跡の位置と環境……2

Ⅲ．調査の記録……4
　1．調査の概要……4
　2．古墳時代前期の遺構と遺物……6
　　(1)竪穴住居跡……6
　　(2)土坑……6
　3．古墳時代後期の遺構と遺物……10
　　(1)土坑……10
　4．古代・中世の遺構と遺物……18
　　(1)竪穴状遺構……18
　　(2)掘立柱建物……20
　　(3)溝状遺構……22
　　(4)井戸……23
　　(5)土坑……27
　5．その他の出土遺物……30

Ⅳ．おわりに……32

挿 図 目 次

Fig. 1　周辺遺跡分布図 (1/25,000)……3
Fig. 2　調査地点位置図 (1/3,000)……3
Fig. 3　調査区位置図 (1/400)……4
Fig. 4　土層柱状図 (1/40)……5
Fig. 5　検出遺構配置図 (1/150)……5
Fig. 6　ＳＣ－３９実測図 (1/60)……6
Fig. 7　ＳＣ－３９出土遺物実測図 (1/3)……6
Fig. 8　ＳＫ－１９実測図 (1/40)……6
Fig. 9　ＳＫ－１９出土遺物実測図・Ⅰ (1/3)……7
Fig.10　ＳＫ－１９出土遺物実測図・Ⅱ (1/3)……8
Fig.11　ＳＫ－４１実測図 (1/40)……9
Fig.12　ＳＫ－４１出土遺物実測図 (1/3)……9
Fig.13　ＳＫ－６２実測図 (1/40)……9
Fig.14　ＳＫ－６２出土遺物実測図 (1/3)……9

Fig.15　ＳＫ－０６実測図（1/40）……10
Fig.16　ＳＫ－０６出土遺物実測図（1/3）……10
Fig.17　ＳＫ－１０実測図（1/40）……11
Fig.18　ＳＫ－１０出土遺物実測図・Ⅰ（1/3）……12
Fig.19　ＳＫ－１０出土遺物実測図・Ⅱ（1/3）……13
Fig.20　ＳＫ－１６実測図（1/40）……13
Fig.21　ＳＫ－１６出土遺物実測図（1/3）……13
Fig.22　ＳＫ－２４実測図（1/40）……14
Fig.23　ＳＫ－２４出土遺物実測図（1/3）……14
Fig.24　ＳＫ－３５実測図（1/40）……14
Fig.25　ＳＫ－３５出土遺物実測図（1/3）……14
Fig.26　ＳＫ－３７実測図（1/40）……14
Fig.27　ＳＫ－３７出土遺物実測図（1/3）……14
Fig.28　ＳＫ－４２実測図（1/40）……15
Fig.29　ＳＫ－４２出土遺物実測図（1/3）……15
Fig.30　ＳＫ－４４実測図（1/40）……15
Fig.31　ＳＫ－４４出土遺物実測図（1/3）……15
Fig.32　ＳＫ－４９実測図（1/40）……16
Fig.33　ＳＫ－４９出土遺物実測図（1/3）……16
Fig.34　ＳＫ－５６実測図（1/40）……16
Fig.35　ＳＫ－５６出土遺物実測図（1/3）……16
Fig.36　ＳＫ－６９実測図（1/40）……17
Fig.37　ＳＫ－６９出土遺物実測図（1/3）……17
Fig.38　ＳＫ－７０、７２実測図（1/40）……17
Fig.39　ＳＫ－７０、７２出土遺物実測図（1/3）……17
Fig.40　ＳＣ－２０実測図（1/60）……18
Fig.41　ＳＣ－２０出土遺物実測図（1/3）……18
Fig.42　ＳＣ－２５実測図（1/60）……19
Fig.43　ＳＣ－２５出土遺物実測図（1/3）……19
Fig.44　ＳＢ－７３実測図（1/80）……20
Fig.45　ＳＢ－７３出土遺物実測図（1/3）……21
Fig.46　ＳＢ－７５、ＳＡ－７４実測図（1/80）……22
Fig.47　ＳＢ－７５出土遺物実測図（1/3）……22
Fig.48　ＳＤ－２１出土遺物実測図（1/3）……22
Fig.49　ＳＥ－０４実測図（1/40）……23
Fig.50　ＳＥ－０４出土遺物実測図（1/3）……23
Fig.51　ＳＥ－３０実測図（1/40）……24
Fig.52　ＳＥ－３０出土遺物実測図（1/3）……24
Fig.53　ＳＥ－６４実測図（1/40）……25
Fig.54　ＳＥ－６４出土遺物実測図（1/3）……25

Fig.55　ＳＥ－６８実測図（1/40）……26
Fig.56　ＳＥ－６８出土遺物実測図（1/3）……27
Fig.57　ＳＫ－１７実測図（1/40）……27
Fig.58　ＳＫ－１７出土遺物実測図（1/3）……27
Fig.59　ＳＫ－４７実測図（1/40）……28
Fig.60　ＳＫ－４７出土遺物実測図（1/3）……28
Fig.61　ＳＫ－５１実測図（1/40）……28
Fig.62　ＳＫ－５１出土遺物実測図（1/3）……28
Fig.63　ＳＫ－６３実測図（1/40）……28
Fig.64　ＳＫ－６３出土遺物実測図（1/3）……29
Fig.65　ＳＫ－６５実測図（1/40）……29
Fig.66　ＳＫ－６５出土遺物実測図（1/3）……29
Fig.67　その他の出土遺物実測図（1/3）……31

図 版 目 次

PL. 1　調査区全景（南西から）

PL. 2　1．竪穴住居跡ＳＣ－３９（東から）
　　2．土坑ＳＫ－４１（南から）

PL. 3　1．土坑ＳＫ－０６（南から）
　　2．土坑ＳＫ－１０（南西から）

PL. 4　1．竪穴状遺構ＳＣ－２０（南東から）
　　2．竪穴状遺構ＳＣ－２５（北西から）

PL. 5　1．井戸ＳＥ－０４（南西から）
　　2．井戸ＳＥ－３０（南東から）

PL. 6　1．井戸ＳＥ－６４、土坑ＳＫ－６５（南から）
　　2．井戸ＳＥ－６８（東から）

PL. 7　出土遺物・Ⅰ

PL. 8　出土遺物・Ⅱ

PL. 9　出土遺物・Ⅲ

PL. 10　出土遺物・Ⅳ

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経過

平成６年４月、福岡市博多区堅粕４丁目16－18において、森俊子氏によって共同住宅ビル建設が計画され、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に遺跡の有無についての事前審査願が提出された。同地区は福岡市文化財分布地図上では吉塚遺跡群に含まれ、遺跡の存在が予想された。埋蔵文化財課では平成６年７月５日と９月22日の２回にわたって試掘調査を実施し、その結果、地表下40㎝で遺物包含層を、更に60㎝で土坑、柱穴を検出し、弥生時代から古墳時代にわたる集落跡の存在することが明らかとなった。埋蔵文化財課では遺跡の保存を考慮し、設計変更を含めて協議を重ねたが、建物の構造上、地下の遺構への影響は避け難く、やむなく記録保存のための発掘調査を実施することで合意に至った。建物は申請地の南側道路際に寄せて建設される予定であったため、発掘調査は工事によって破壊を受ける建物の範囲についてのみを対象とした。

発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課が受託調査として行うこととなり、調査に先立って、森俊子氏と福岡市長との間に委託契約書を締結した。平成６年11月７日から12月13日まで発掘調査を、12月28日まで遺物洗浄等の作業をそれぞれ行い、平成７年度に整理報告書作製を行った。

2．調査の組織

調査は以下の組織で行った。調査にあたり、森俊子様には調査費用をはじめとして、条件整備等で多大なるご協力を頂いた。また、調査中は周辺の住民の皆様にご理解、ご協力を頂き、調査を円滑に進めることができた。ここに記して感謝を申し上げたい。

調査委託　森　俊子
調査主体　福岡市教育委員会　教育長　尾花　剛
調査総括　埋蔵文化財課長　折尾　學（前）、荒巻輝勝（現）
　　埋蔵文化財第２係長　山崎純男（前）、山口譲治（現）
調査庶務　埋蔵文化財第１係　西田結香
調査担当　埋蔵文化財第２係　山口譲治、菅波正人（試掘担当）
　　埋蔵文化財第２係　吉武　学（調査担当）
調査作業　石屋四一、金沢春雄、金子國雄、熊本義徳、渋谷博之、高崎秀巳、高田勘四郎、
　　高田勲、西田昭、二宮白人、萩尾行雄、藤田圭三、松原高博、森垣隆視、森本勇夫、
　　米倉國弘、金子澄子、唐島栄子、境フジ子、酒井康恵、正林真由美、杉村百合子
整理調査員　田中克子
整理作業　安部国恵、有島美江、井澤早苗、大神真理子、太田富美子、富田輝子、西村晴香、宮坂環

Ⅱ．遺跡の位置と環境

博多湾岸には、海岸に沿って古砂丘がいくつも形成されており、こうした砂丘上に大小規模の遺跡の存在することが近年の調査で明らかとなってきた。吉塚遺跡群の位置する福岡平野の湾岸には、博多遺跡群が立地する博多浜を起点に、ここから東側へ断続的に砂丘が伸び、この上に堅粕遺跡群、吉塚本町遺跡、箱崎遺跡群が存在し、古代～中世を主とする大規模な遺跡群の存在することが明らかになっている。吉塚遺跡群はこれらの砂丘列からひとつ内陸へ下がった砂丘列の上に位置する。この砂丘は北東－南西の方向に伸び、本調査地点の周辺で最も高くなっていることが現在の地図からも見てとれる。吉塚遺跡群の南側は後背湿地となっており、ここに位置する豊遺跡ではこれまで集落遺構の調査例がない。

吉塚遺跡群第１次調査地点は、第２次調査地点の南西側約200ｍに位置する。都市高速道路の建設に伴い、1986年(昭和61年)８月～1987年10月にかけて福岡市教育委員会が調査を行った。土坑、溝、掘立柱建物、井戸等が検出され、弥生時代中期から中世にかけての集落跡であることが明らかとなった。貨泉、銅鏃、山陰系甑形土器など特色ある遺物が出土している。

また、周辺遺跡の調査状況は以下の通りである。

堅粕遺跡群

調査地の北西側にあたる。最も近い別の砂丘上に位置する遺跡である。６次(第２次は欠番)の調査が行われている。奈良～平安時代の集落を主体とする遺跡で、越州窯系青磁、緑釉陶器、瓦、墨書土器等の出土から、律令期の公的施設の存在が考えられている。この他にも、古墳時代前期の方形周溝墓や後期の土壙墓などが確認されている。

吉塚本町遺跡

調査地の北側にあたる。これまでに４次の調査が行われている。弥生時代後期～古代にかけての集落跡や近現代の旧国鉄操車場の基礎等が検出された。集落としては古代に最も広がりを見せ、土錘、製塩土器等の漁撈具や、硯、瓦等を持つことから、漁撈や製塩といった経済活動に関わりながら、何らかの公的な関係を持ち得た集落の可能性が考えられている。

箱崎遺跡群

調査地の北側にあたる。現在までに７次の調査が行われた。古代末～近世の集落が検出され、出土した多量の輸入陶磁器から、箱崎遺跡群が博多遺跡群と並ぶ中世の対外貿易の拠点だったことが確認されている。また、江戸時代に描かれた筥崎宮絵図中の「赤幡坊」の建物地業跡ではないかと推定される遺構が検出され、筥崎宮創建期の遺構の発見が期待されている。

博多遺跡群

調査地の西側にあたる。地下鉄関係の調査に始まり、道路関係で５次、公共・民間開発に伴う93次の調査が行われている。弥生時代中期から現代にいたる複合遺跡である。遺跡の主体をなすのは中世都市博多で、博多浜から息の浜へ都市が拡大していく状況や太閤町割り以前の町割りの復元、あるいは対外交渉の拠点であることをしめす膨大な量の輸入陶磁器の出土等、中世における重要な遺構・遺物の発見は枚挙にいとまがないほどである。

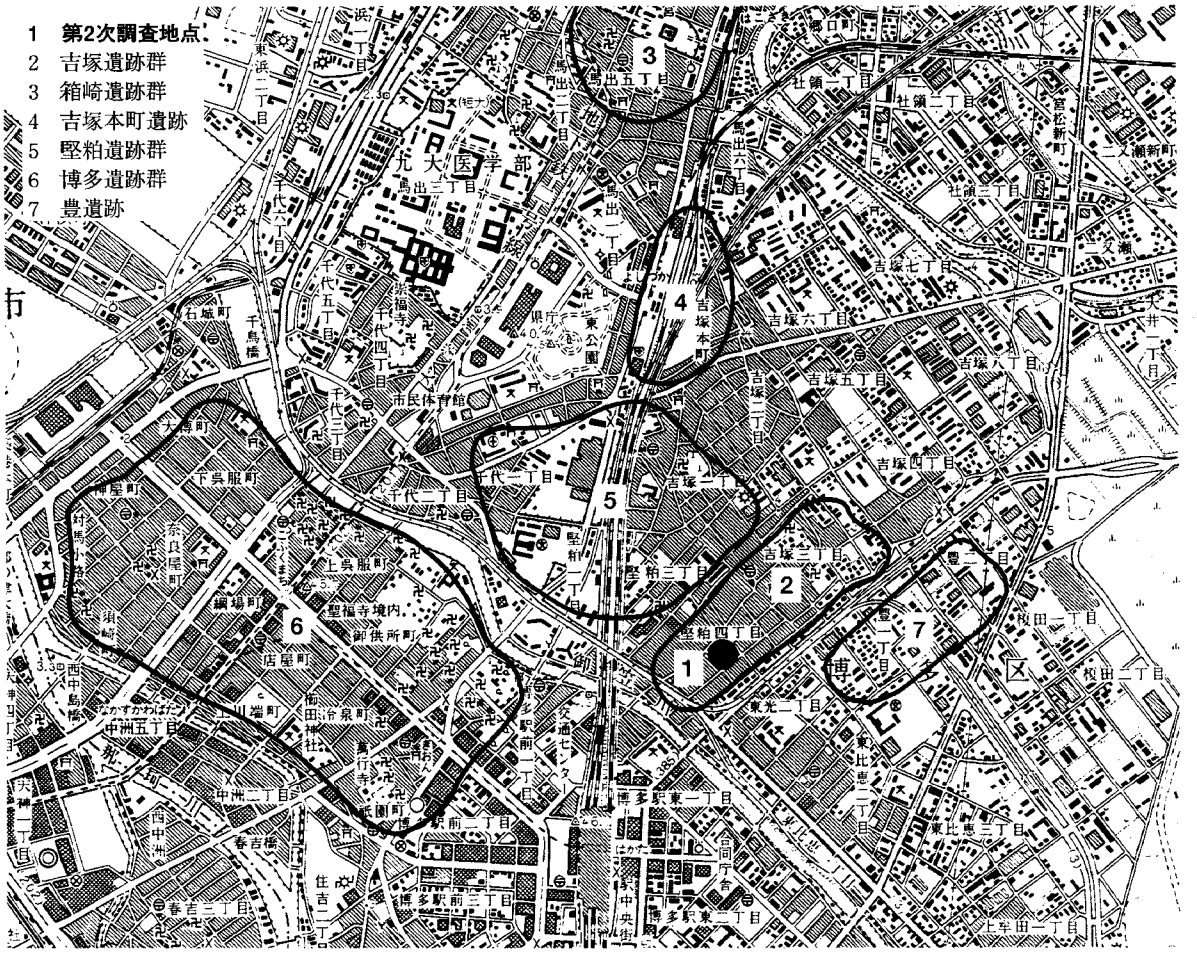


Fig. 1　周辺遺跡分布図（1/25,000）

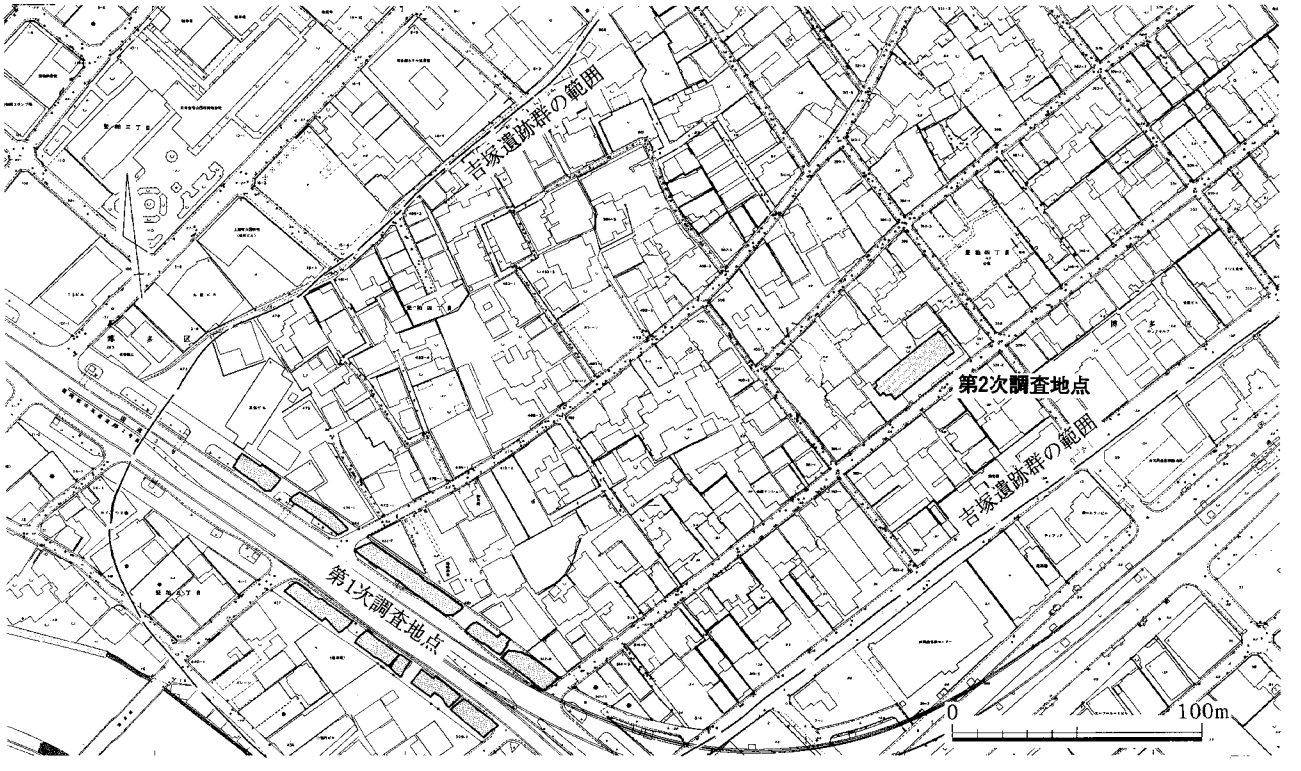


Fig. 2　調査地点位置図（1/3,000）

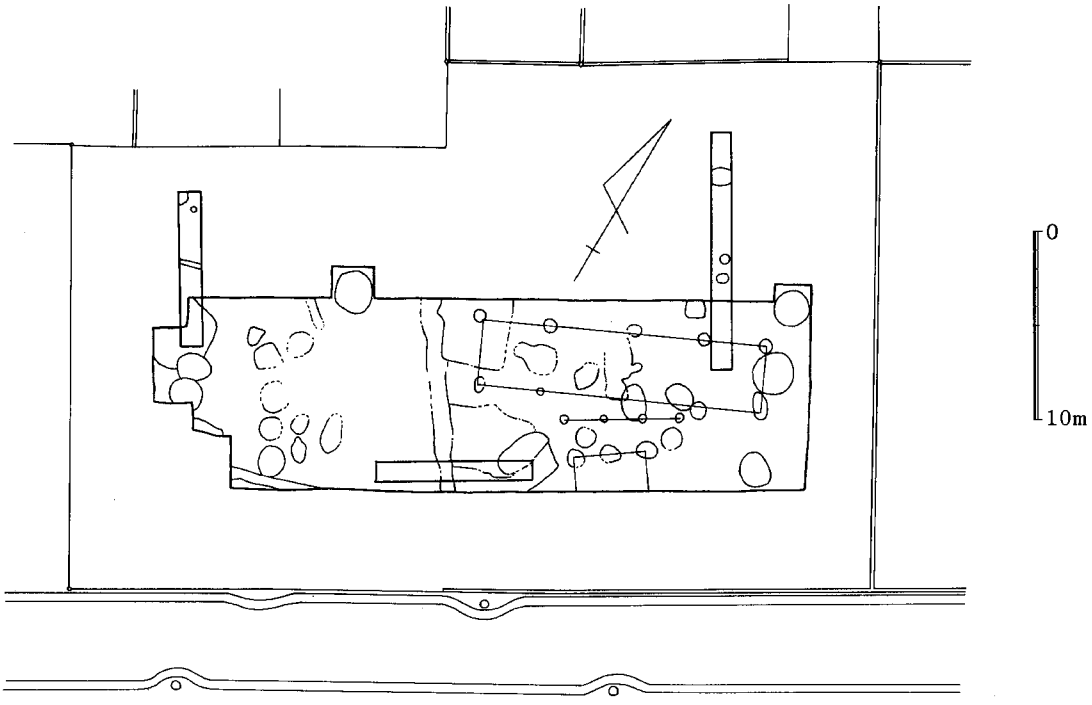


Fig. 3　調査区位置図（1/400）

Ⅲ．調査の記録

1．調査の概要

調査地点は北東－南西の方向に伸びる砂丘が最も高まった部分に位置しており、標高は約４ｍである。調査前は住宅地であった。

試掘調査では地表下40㎝で遺物包含層にいたり、包含層は約20㎝の厚みで遺構面を覆っていることが判明していた。調査中の土層観察により、多くの遺構がこの包含層中から掘りこまれていることが分かったが、多数の攪乱坑によって包含層の残りが悪いこと、遺構の覆土が包含層に近似すること、調査期間の制約などから、包含層上面での遺構検出を断念し、地表下60㎝の淡黄褐色砂上面で一面のみの調査を行うにとどめた。

調査区は建築予定の構造物の範囲にあわせて設けたが、道路に面した南側以外は宅地であり、また西側には倒壊寸前の板塀などがあったため、引きをかなり広めに取っている。調査区は当初、東西30ｍ、南北10ｍに設定し、その後調査区壁際に検出した井戸等を全掘するため、人力により部分的な拡張を行った。

調査区内での遺構検出面の標高は、東端部で3.6ｍ、中央部で3.8ｍ、西端部で3.4ｍを測り、中央がやや高く、西へ緩く傾斜している。

層位を見るため調査区東端に深いトレンチを入れ、Fig. 4 を作製した。③淡黄褐色砂の上面が遺構検出面である。その上層に遺物包含層である②黒褐色砂がのっており、これは風成砂と見られる。下層には数層にわたって異なる生成を示す砂が堆積しており、地表下2.7ｍまで下げて湧水を見た。湧水レヴェルは標高1.6ｍであった。

検出した遺構は以下の通りである。

古墳時代前期　竪穴住居跡１
　　土坑３
古墳時代後期　土坑13
古代・中世　竪穴状遺構２
　　掘立柱建物３(柵列を含む)
　　溝状遺構２
　　井戸４
　　土坑５
近世以降　井戸１
　　攪乱坑多数

しかし、攪乱が著しいこと、砂丘上で複雑に遺構が切り合うこと、調査のミスなどにより、時期的に異なる遺物が同じ遺構に含まれることが多く、遺構の時期決定には誤りの有ることを否めない。

出土遺物はコンテナにして約10箱分である。弥生時代中期の土師器、古墳時代前期の古式土師器、同後期の土師器・須恵器・赤焼き土器、古代の土師器・須恵器、中世の土師器・輸入陶磁器・石鍋・土錘などがある。量的には古墳時代初頭の布留式土器が多数を占めるが、これらの大半は包含層に含まれていたものである。

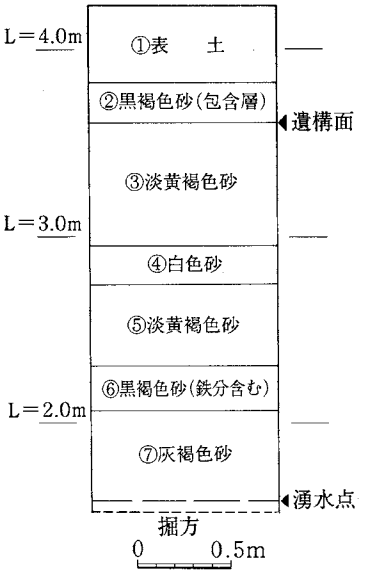


Fig. 4　土層柱状図 (1/40)

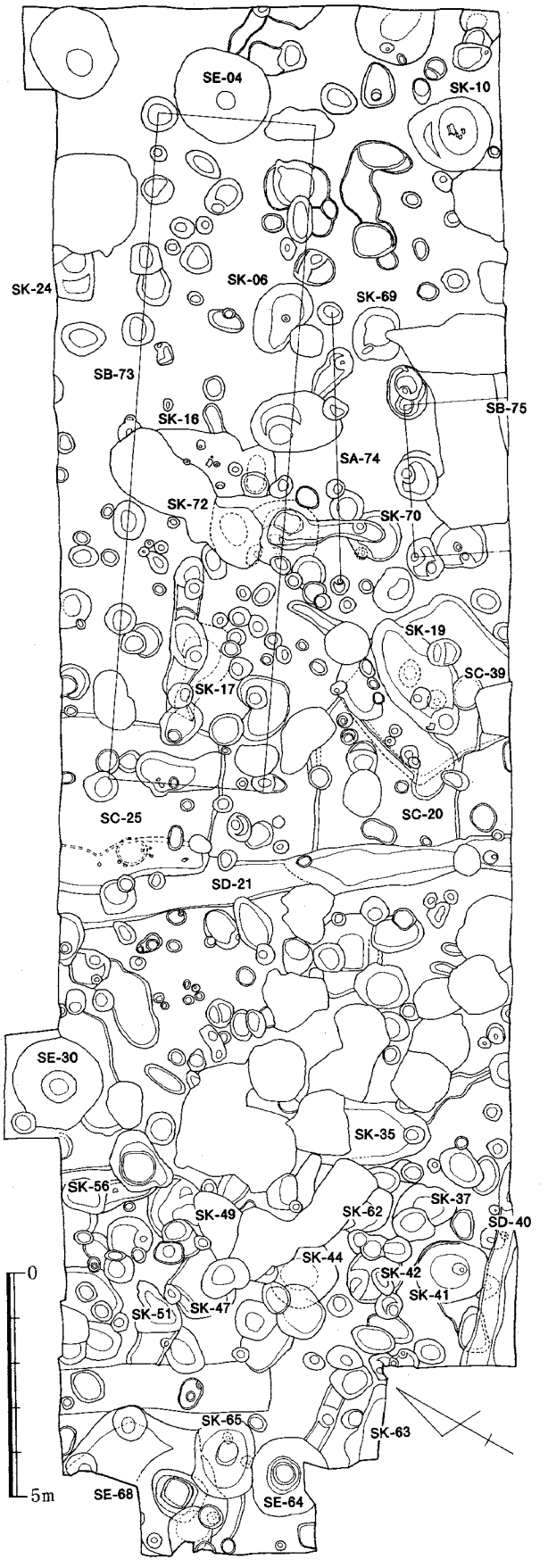


Fig. 5　検出遺構配置図 (1/150)

2．古墳時代前期の遺構と遺物

(1)竪穴住居跡

ＳＣ－３９　Fig. 6　PL. 2

調査区中央の南壁際に検出した竪穴住居跡である。隅丸方形プランを呈し、一部が調査区外にある。住居跡の中央部をえぐるSK－19を始め多数の土坑、柱穴等に切られており、遺構の残りは悪い。住居跡覆土は暗褐色砂であった。南北3.5m、東西3.6mを測り、深さは0.1m強である。主柱穴は、住居跡の中央部に配置された２本であると考えられる。主柱穴は円形で、SK－19に切られて浅いが、現況で径が0.45m～0.6mで、深さは0.2～0.3mである。住居跡の北西隅に浅い土坑がある。貼床、焼土等は検出していない。

弥生土器・土師器の破片が13点出土した。古墳時代前期の遺構と見られる。

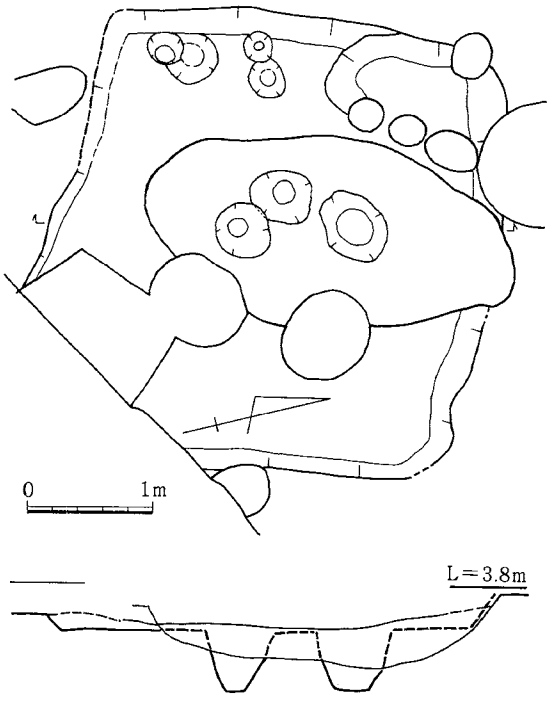


Fig. 6　ＳＣ－39実測図（1/60）

ＳＣ－３９出土遺物　Fig. 7

１は土師器の甕形土器小片である。口縁は屈曲して短く開く。調整は概ね刷毛目によって行い、胴部内面をナデ消し、口縁部外面を横ナデする。口縁端部は未調整である。胎土に砂粒を含み、焼成は不良である。図上で復元した口径は16.8cmである。

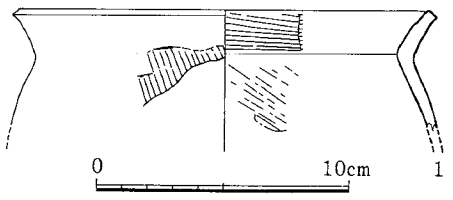


Fig. 7　ＳＣ－39出土遺物実測図（1/3）

(2)土坑

ＳＫ－１９　Fig. 8

調査区中央南側に検出した、竪穴住居跡SC－39を切る土坑である。平面プランは南北に長い楕円形を呈し、長径3.0m、短径1.5mを測る。深さは0.5mである。遺構の覆土は黒褐色砂であった。

遺物は弥生土器・土師器の破片が307点、須恵器片が７点出土した。須恵器は主に上層から出土しており、混入品と思われる。土師器の甕形土器が多量に出土しており、遺構の時期は古墳時代前期と見られる。

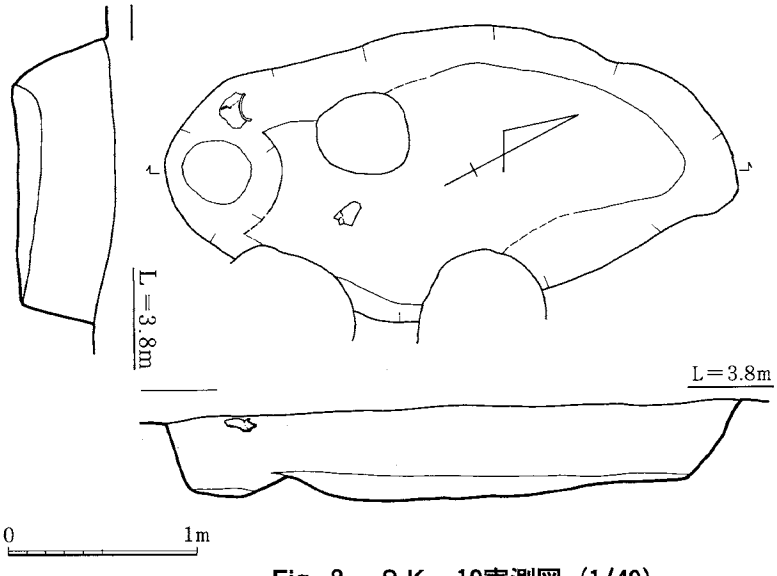


Fig. 8　ＳＫ－19実測図（1/40）

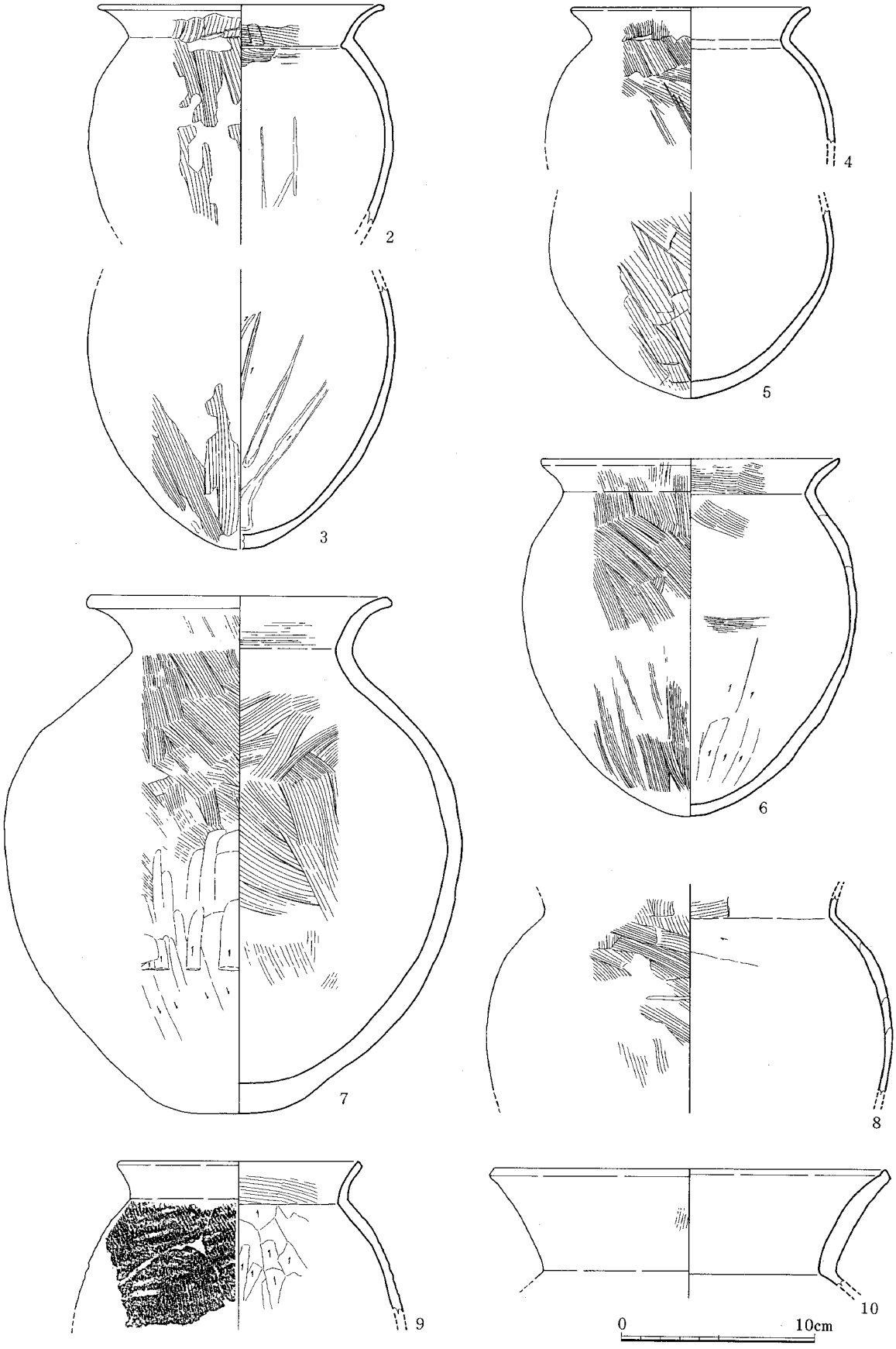


Fig. 9　ＳＫ－19出土遺物実測図・Ⅰ (1/3)

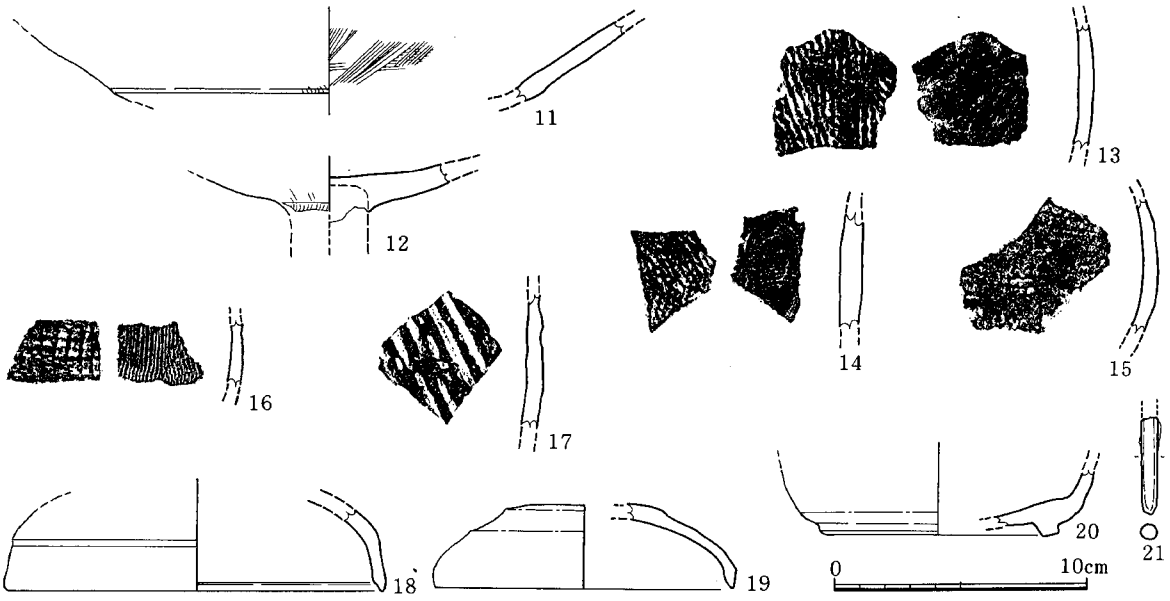


Fig.10　ＳＫ－19出土遺物実測図・Ⅱ（1/3）

ＳＫ－１９出土遺物　Fig. 9、10　PL. 7、10

２～12は古墳時代前期の土師器である。２～９は甕形土器である。２、３は接合しないが同一個体の可能性がある。倒卵形の胴部で、口縁は外湾し端部は丸い。口縁部を胴部に差し込んで接合しており、接合部は内側へ突出する。調整は、外面がナデの後、雑に刷毛目、内面は接合部付近を横方向の刷毛目、胴部はナデの後、底部から上へ放射状にヘラで削る。最後に口縁内外を横ナデする。復元口径14.7cm、胴部最大径は15.8cm。４は球形の胴部で、口縁は外湾して開く。外面は細かい刷毛目、内面はナデ調整で、口縁部を横ナデする。復元口径は12.3cm。５は胴部下半の破片で、外面は目の粗い刷毛目、内面はナデ調整である。６は器形・調整とも２、３に類似する。縦割れした1/2の破片で、復元口径15.3cm、胴部最大径は17.2cm、器高18.1cmである。７はやや大振りの甕である。口縁は緩く屈曲して外反する。底部は平底の名残りがあり厚い。内外面に刷毛目を施した後、口縁部内外を横ナデ、胴部外面下半をヘラ削り、内面は上端と下半をナデ調整している。ほぼ完全に残っており、口径15.5cm、胴部最大径23.2cm、器高26.5cmを測る。８は口縁部内面と外面を刷毛目調整、胴部内面は上端に軽いヘラ削り、以下をナデ調整する。９はナデ肩の胴部で、口縁端部は面取りする。胴部外面は左下がりの叩き目を施した後刷毛目でナデ消している。口縁部内面には刷毛目、胴部内面にはヘラナデ調整を加え、最後に口縁端部を横ナデする。復元口径12.6cm。10は壺形土器の口縁部片である。緩く外反し、端部は内側へやや肥厚する。口縁外面に刷毛目が僅かに残り、横ナデ調整で消されている。胴部内面はヘラ削りを加える。復元口径は20.6cm。11、12は高坏である。11は坏部で、屈曲部外面に僅かな段がある。刷毛目調整した後、外面横ナデ、内面には縦方向に雑なヘラ磨きを加える。12は坏底で、脚を坏に差し込んで接合している。外面に刷毛目を施した後横ナデ、内面はナデ調整である。

13～15は叩き目を有する土師器の一群である。ともに小片にすぎない。13、14はいずれも外面に縄席文叩きを施す。内面は13が弧状文のアテ具をナデ消し、14は上半に半円文、下半に緩い弧状文のアテ具痕が残る。15は外面平行叩きをナデ消し、内面ナデ調整。16は外面凝格子叩き、内面刷毛目調整。17は外面が粗い平行叩き、内面ナデ調整である。

18～20は須恵器片である。18、19は坏蓋で、18は口唇部に段が残る。20は坏で高台が貼り付く。

21は鉄製品である。鏃の茎か。棒状を呈し、上部は失われている。

ＳＫ－４１　Fig.11　PL. 2

調査区の南西隅に検出した土坑である。南北に長い円形プランを呈し、長径1.6ｍ、短径1.3ｍ、深さ0.6ｍを測る。基底面には深さ0.2ｍのピットがひとつある。弥生土器・土師器の小片が54点出土した。

ＳＫ－４１出土遺物　Fig.12

22は土師器二重口縁壺の口縁部片で、外面の刷毛目を横ナデ調整で消している。23は土師器甕形土器の口縁部小片で、横ナデ調整。24は土師器広口壺の口縁部であろう。外面ヘラナデ、内面刷毛目で、口縁端部を面取りし、横ナデ調整。25は叩き目を持つ土師器である。小片で、外面は縄蓆文叩き、内面は指頭痕をナデ消している。混入品か。

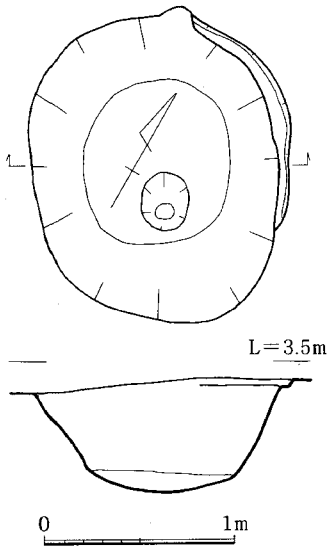


Fig.11　ＳＫ－41実測図（1/40）

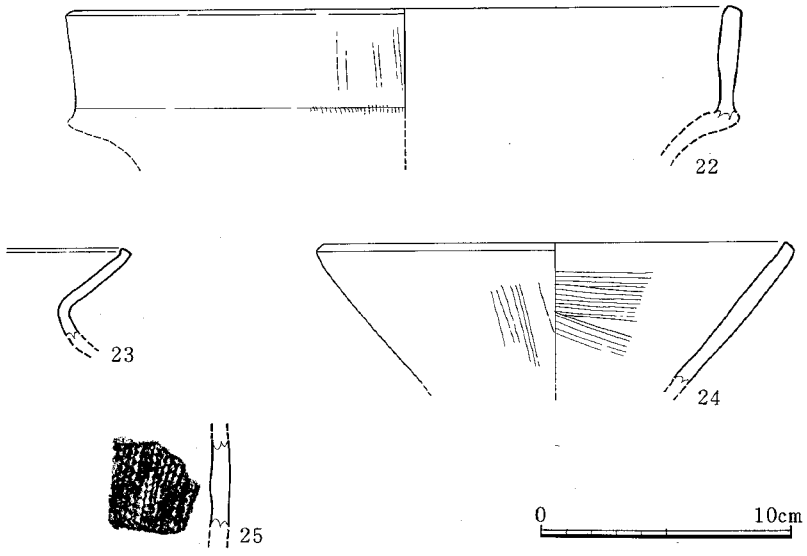


Fig.12　ＳＫ－41出土遺物実測図（1/3）

ＳＫ－６２　Fig.13

SK－41の北側に１ｍの距離をおいて検出した土坑である。攪乱坑に大きく削られており、規模は不明。深さは0.5ｍ。出土遺物は弥生時代後期の土器・土師器の破片47点に須恵器片１点、青磁片１点があるが、後者の２点は攪乱坑から混入したものと思われる

ＳＫ－６２出土遺物　Fig.14

26は土師器甕形土器の口縁部片である。刷毛目調整の後、口縁部は横ナデする。27は高坏の脚部で、透孔がある。外面は刷毛目の後、暗文を入れる。内面はナデ調整で、端部は横ナデ。28は叩き目を持つ土師器の小片で、外面に縄蓆文叩き、内面は弧状のアテ具痕が残る。混入品か。

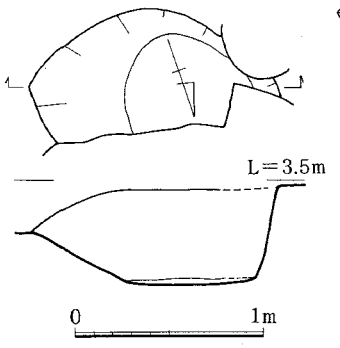


Fig.13　ＳＫ－62実測図（1/40）

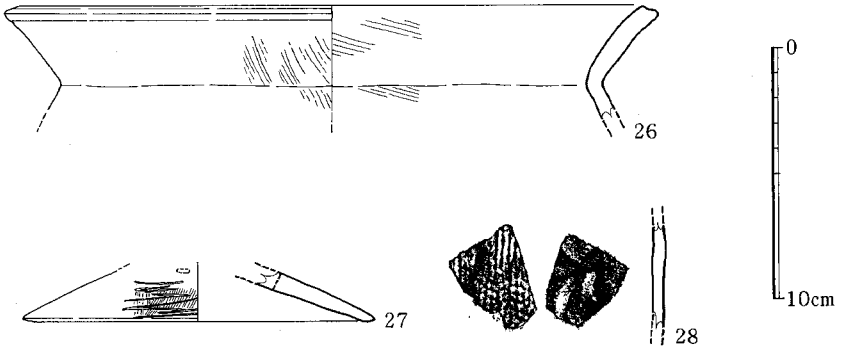


Fig.14　ＳＫ－62出土遺物実測図（1/3）

3．古墳時代後期の遺構と遺物

(1)土坑

土坑は多数を検出したが、遺存状態の悪いもの、出土遺物が少なく図化できないもの、特徴的でないものは、紙面の都合もあり割愛した。結果として、報告できるものは13基である。

ＳＫ－０６　Fig.15　PL. 3

調査区の北よりに検出した土坑である。東西に長い不整な楕円形プランを呈し、長径1.7ｍ、短径1.1ｍ、深さ0.6ｍを測る。土坑底面に浅いピットを検出した。覆土は暗褐色砂で、上層に灰褐色の粘土が堆積していたが、焼けた痕跡等は見られなかった。弥生時代中期から古墳時代後期までの土器片66点、須恵器片７点が出土した。

ＳＫ－０６出土遺物　Fig.16　PL. 7

29は土師器の甕形土器である。外面は平行叩きを一部ナデ消し、内面は弧状文のアテ具痕を上端のみ横にナデ消しており、頸部に近い部分の破片と思われる。暗灯色を呈し、胎土には砂粒・雲母粒等を含む。30、31は須恵器蓋坏である。30は蓋の口縁部片で、端部は丸い。復元口径14.2㎝。31は身で、口縁は内傾し端部は丸い。

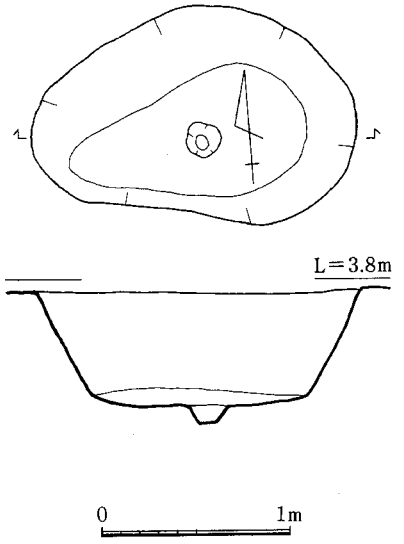


Fig.15　ＳＫ－06実測図（1/40）

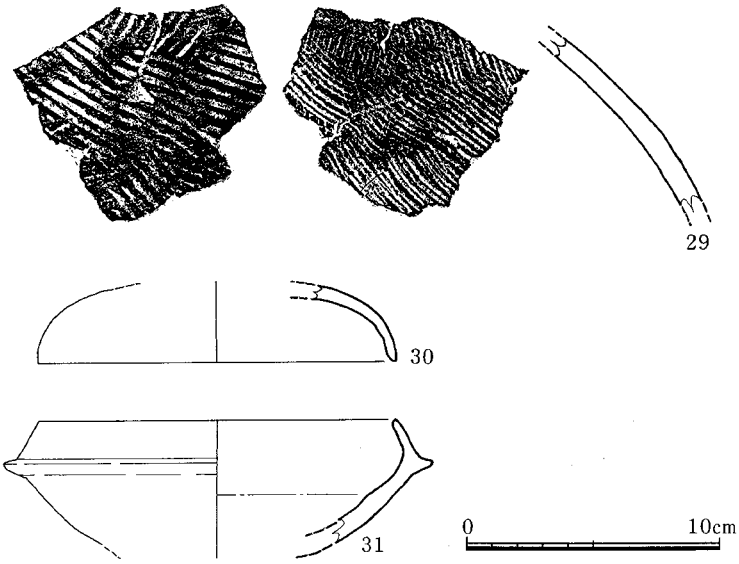


Fig.16　ＳＫ－06出土遺物実測図（1/3）

ＳＫ－１０　Fig.17　PL. 3

調査区南東隅で検出した土坑である。東西に長い楕円形土坑の北側に、もうひとつ浅い土坑がくっついた形をしており、２つの土坑の切り合いかもしれない。前者の土坑は長径1.65ｍ、短径1.35ｍ、深さ0.76ｍで、後者の深さは0.3ｍである。出土遺物は弥生土器・土師器の破片が164点、須恵器片が15点出土しており、小規模の土坑にしては量が多い。

ＳＫ－１０出土遺物　Fig.18、19　PL. 7

32は畿内系の弥生土器で、壺形土器の口縁部である。口縁は内傾しており、端部はＬ字形に外へ張り出す。外面に密に凹線文を横走させる。

33～36は土師器である。33は高坏の脚筒部である。内面にシボリ痕がある。34は小型器台である。ヘラナデ調整。35も器台の脚部と思われる。内外面に横位のヘラ磨きを施す。36は甕形土器である。

口縁は外湾して開き、端部は丸くおさめる。口縁を胴部に差し込んで接合し、外面を指で押さえた痕跡が残る。また、胴部内面にも指頭痕が残る。調整は胴部外面刷毛目、内面ナデ調整、口縁部は横位に刷毛目を施した後、横ナデ調整する。

37～45は外器面に叩き目を持つ土師器を抽出したものである。いずれも酸化焔焼成により灯色に発色し、胎土には砂粒を少量含むが比較的精良である。外面の叩きは、44を除き、叩き板の板目が浮き出た凝格子文様である。内面にはゆるい弧状のアテ具痕が見られるが、40のように刷毛目をナデ消したり、41のように指頭痕をナデ消したものもある。42は唯一口縁部までつながった資料である。壺形の器形をなし、口縁部は外湾して開く。整形・調整は、外面が平行叩き（板目が少し浮き出す）のままで、内面はゆるい弧状のアテ具痕をナデ消しており、口縁は横ナデ調整し、最後に頸部外面にカキ目を入れる。橙褐色～黒褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母粒を少量含み、焼成は良好である。復元口径19.8cm。44は底部に近い部位の破片と思われる。外面は平行叩き、内面は指頭痕を刷毛目で押さえた後、部分的にナデ消している。暗橙色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。45は甑の一部で、把手部をヘラ成形した後、板目の浮き出し始めた平行文様の板で叩きしめている。内面はゆるい弧状のアテ具痕を残す。橙褐色～淡橙色を呈し、胎土に砂粒を少量含み。焼成は良好である。

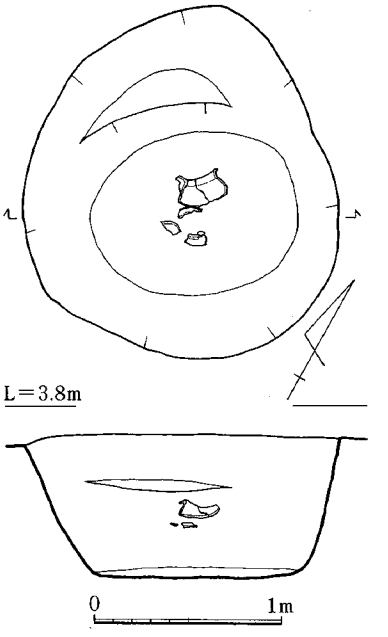


Fig.17　ＳＫ－10実測図（1/40）

46は土師器甑の把手である。ヘラで成形している。

47～52は須恵器である。47は高坏である。ロクロ成形の後、内底をナデ、外底を回転ヘラ削り調整する。48は壺の口縁部であろうか。49は高坏の脚部である。透孔が切られており、裾端部は面取りして窪む。50は平瓶か。体部上面に沈線２条が巡り、体部の中心からずれた位置に口縁部を付けている。口縁部にも沈線２条をまわしている。51は小壺もしくは瓶の一部と思われる。内面にロクロ目をよく残し、外面は回転ヘラ削りを加えている。52は甕の胴部片である。外面は平行叩きの上から沈線を２条まわす。内面はアテ具痕をナデ消している。

ＳＫ－１６　Fig.20

SK－06の西に２ｍ置いて検出した土坑である。北西側を攪乱坑に大きく切られる。隅丸方形プランの土坑の南側に、楕円形プランの土坑が取りついた形を呈しており、２つの土坑の切り合いの可能性がある。南北2.5ｍ、東西1.5ｍ、深さ0.3ｍを測る。出土遺物は、弥生土器・土師器の破片が110点、須恵器片が４点出土した。６世紀後半の遺構である。

ＳＫ－１６出土遺物　Fig.21　PL.８

53、54は遺構実測図中に示した位置より出土した。53は弥生土器である。口縁はやや内湾して開き、胴部はナデ肩である。胴部外面は刷毛目調整、内面はヘラナデ調整で、最後に口縁内外を横ナデ調整している。54は須恵器蓋坏の身である。口縁は内傾し端部は尖り気味に丸くおさめる。ロクロ回転は上から見て時計回りである。内底には指頭痕があり、ナデ消している。外底はヘラ切りし、「－」とヘラ記号を入れる。完存しており、口径10.8cm、最大径13.3cmを測る。九州須恵器編年のⅣa期に位置づけることができよう。

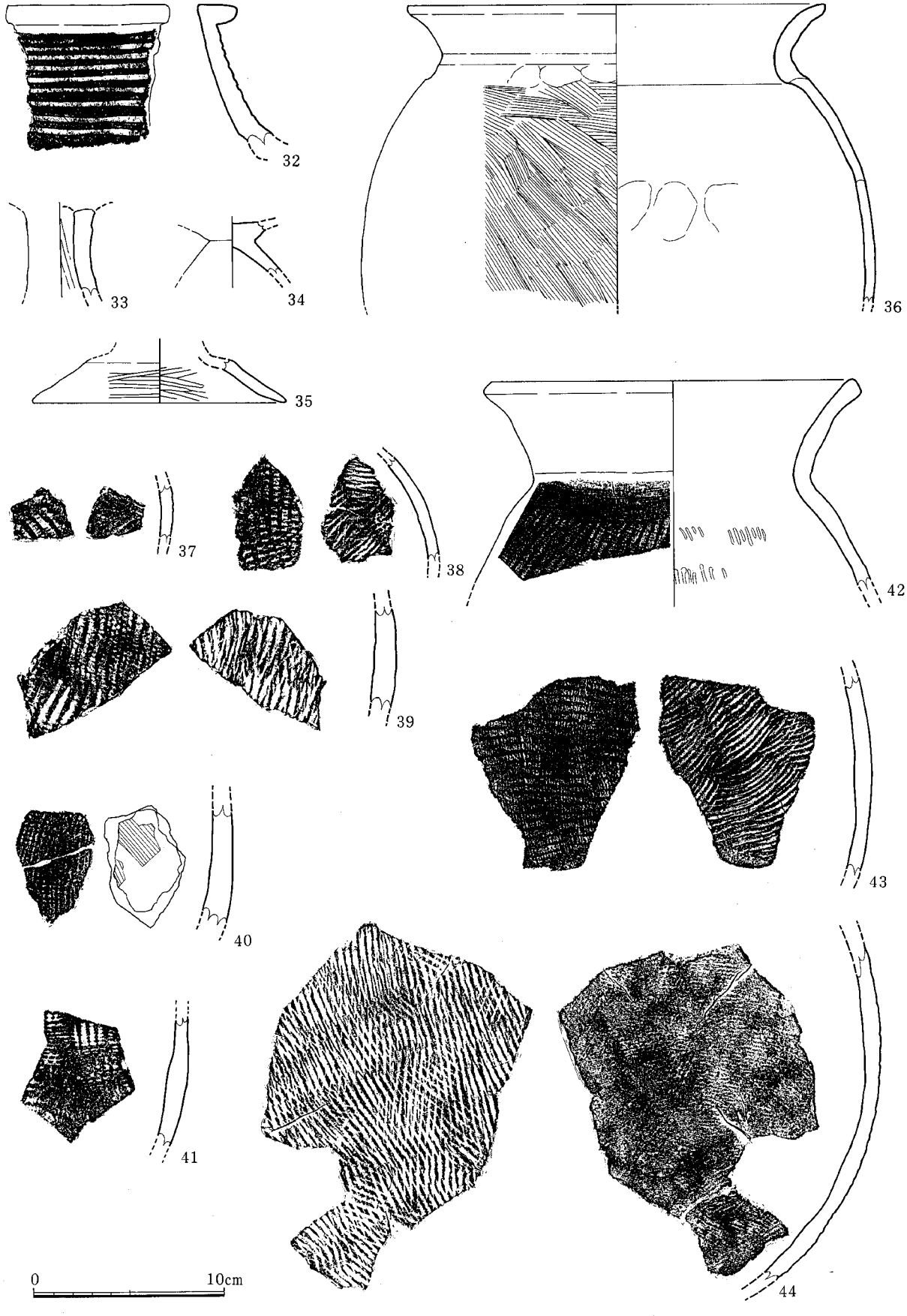


Fig.18　ＳＫ－10出土遺物実測図・Ⅰ（1/3）

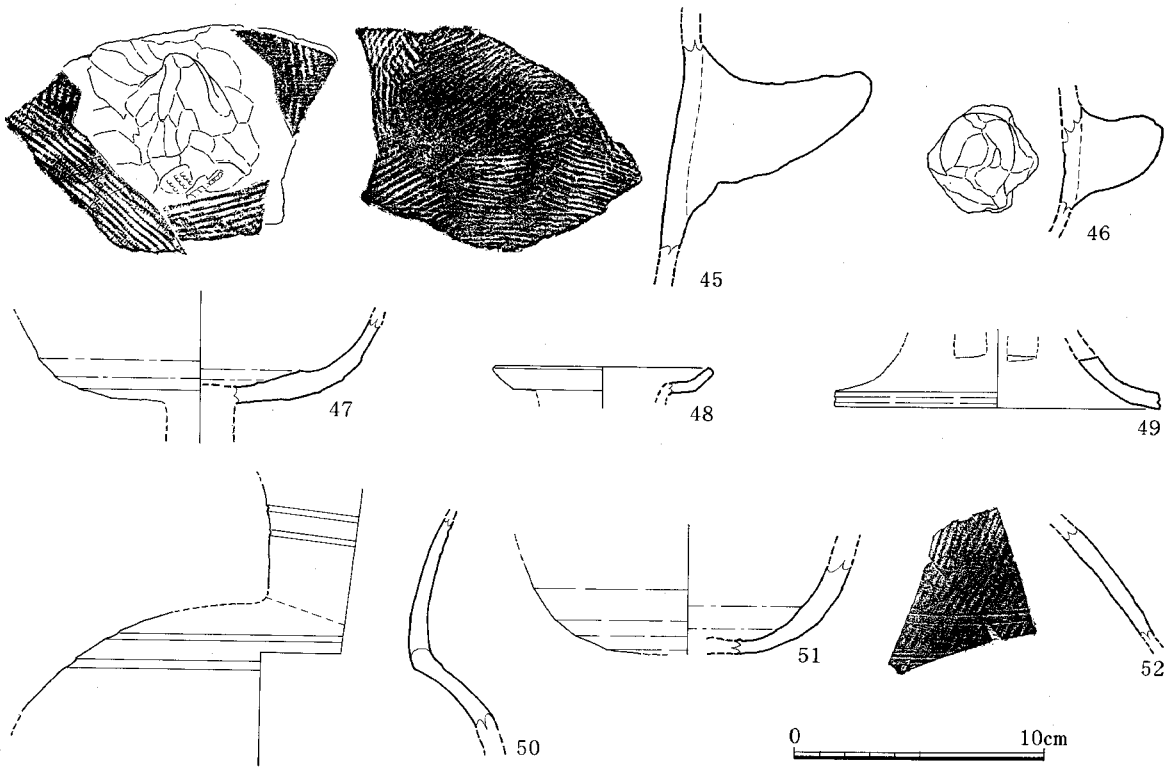


Fig.19　ＳＫ－10出土遺物実測図・Ⅱ（1/3）

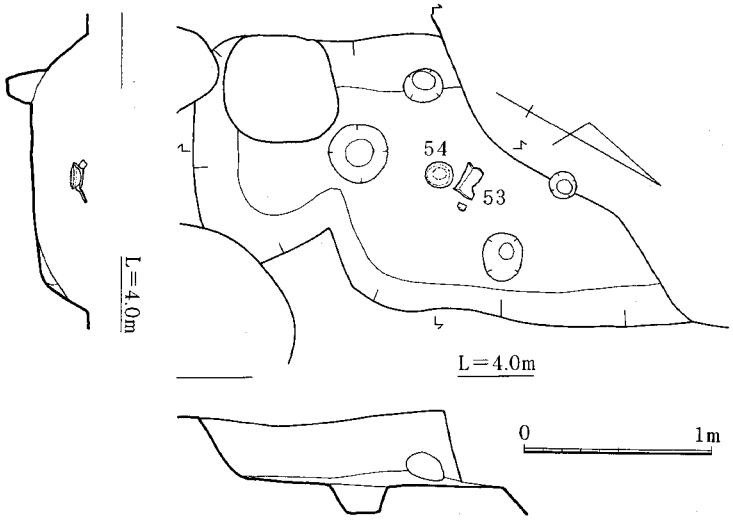


Fig.20　ＳＫ－16実測図（1/40）

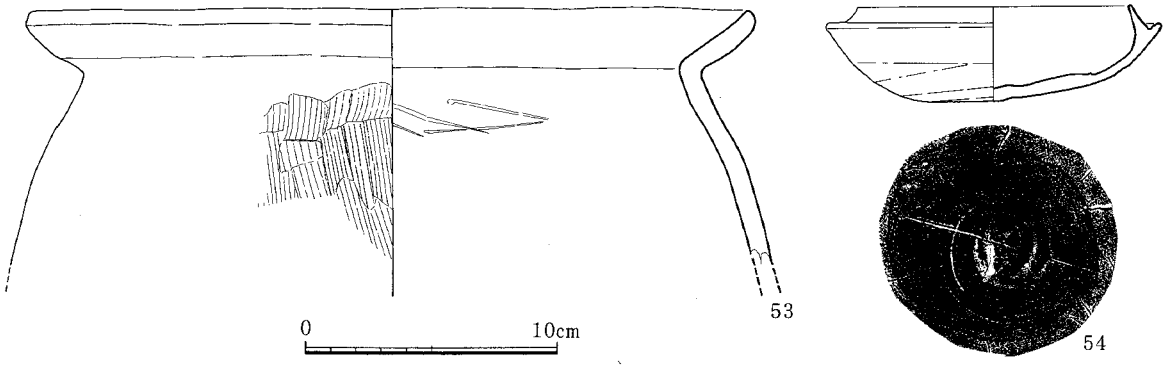


Fig.21　ＳＫ－16出土遺物実測図（1/3）

ＳＫ－２４　Fig.22

調査区北東隅に検出した土坑である。北側は調査区外に伸び、東側の一部を攪乱坑に切られる。平面形は北に狭い不整な隅丸長方形を呈する。東に一段深く、深さ0.3ｍを測る。弥生土器・土師器の破片が41点、須恵器片が３点出土した。

ＳＫ－２４出土遺物　Fig.23

55は土師器壺形土器の口縁部片である。外面に刷毛目を施した後、横ナデ調整する。復元口径は13.9cm。56は土師器の甕形土器である。頸部から肩部にかけての小片で、内面はヘラ削り調整。外面は刷毛目調整の後、横ナデし、肩部に櫛状施文具で波状沈線を入れる。SE－64（中世の井戸）から類似の土器が出土している（Fig.54-124）。57は須恵器の壺形土器口縁部片である。外湾して開き、端部は肥厚させ、口唇下端に凹線を巡らす。

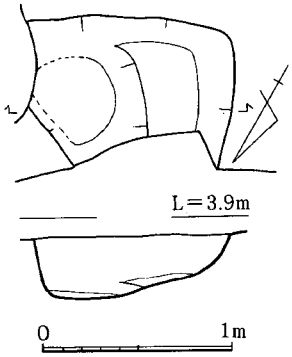


Fig.22　ＳＫ－24実測図（1/40）

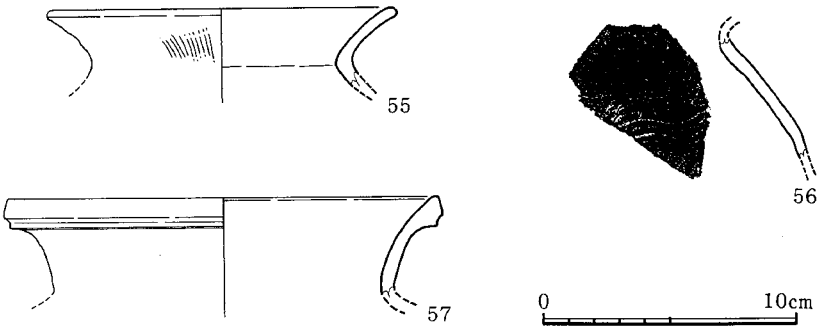


Fig.23　ＳＫ－24出土遺物実測図（1/3）

ＳＫ－３５　Fig.24

調査区南西よりに検出した土坑で、北側は攪乱坑に切られる。平面形は南北に長い楕円形プランで、長径不明、短径1.4ｍ、深さ0.4ｍを測る。土坑底面の南に寄せて、深さ0.3ｍのピットを掘る。弥生土器・土師器片が42点、須恵器片が１点出土した。

ＳＫ－３５出土遺物　Fig.25

58は須恵器蓋坏である。身の小片で、口縁端部は丸くおさめる。ロクロ回転は時計回り。復元口径9.8cm、最大径12.0cmである。

ＳＫ－３７　Fig.26

SK－35の南に隣接して検出した土坑である。二つの土坑の切り合いと見られる。ともに南北に長い楕円形プランを呈し、東側の土坑が長径1.4ｍ、短径0.9ｍ、深さ0.4ｍを、西側の土坑が長径1.0ｍ、短径0.7ｍ、深さ0.55ｍをそれぞれ測る。出土遺物は、古式土師器片を中心に50点、須恵器片３点が出土した。

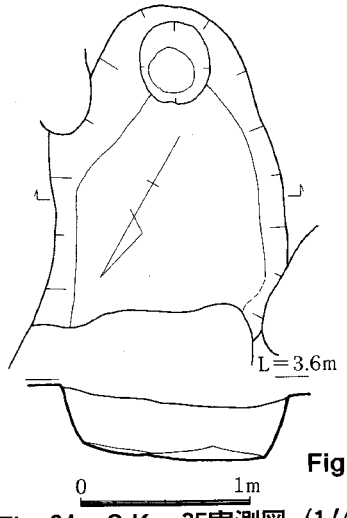


Fig.24　ＳＫ－35実測図（1/40）

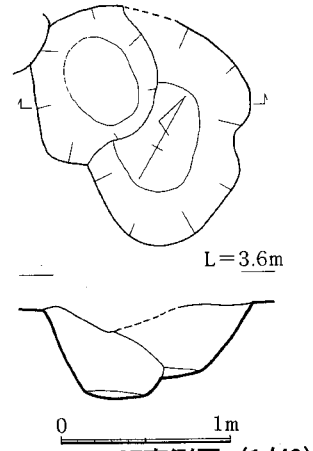


Fig.26　ＳＫ－37実測図（1/40）

Fig.25　ＳＫ－35出土遺物実測図（1/3）

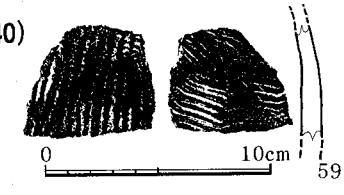
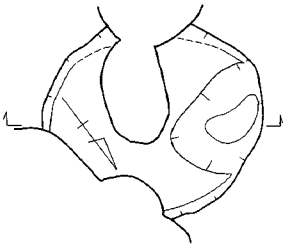


Fig.27　ＳＫ－37出土遺物実測図（1/3）

ＳＫ－３７出土遺物　Fig.27　PL.8

59は土師器で、甕形土器の胴部片か。外面は板目の浮出した平行叩き、内面はゆるい弧状のアテ具痕を部分的にナデ消している。灯色を呈し、胎土に砂粒を少量含む。



ＳＫ－４２　Fig.28

SK－37の西に隣接して検出した土坑である。後世の土坑、ピットに切られ残りが悪い。平面プランはほぼ円形を呈し、径1.2～1.3m、深さ0.2mを測る。土坑底面の西寄りに深さ0.2mの浅い窪みがある。土師器片が23点、須恵器片が３点出土した。

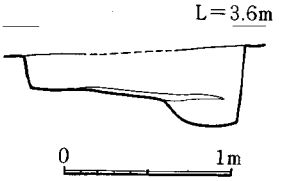


Fig.28 ＳＫ－42実測図(1/40)

ＳＫ－４２出土遺物　Fig.29　PL.8

60は須恵器の有蓋高坏で、坏部から脚部上端にかけての破片である。口縁にかえりを持ち、端部は上方へ立ち上がり、尖り気味に丸くおさめる。ロクロ成形した後、脚を坏底に貼り付ける。坏部内底は部分的にナデ調整を加える。脚部は外面に横位のカキ目、内面にはしぼり痕が見られる。焼成時に伏せ焼きをしており、外面は厚く灰に被われている。

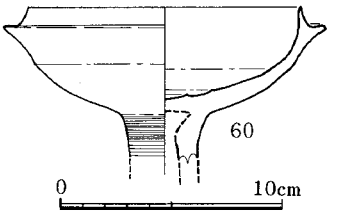


Fig.29　ＳＫ－42出土遺物実測図（1/3）

ＳＫ－４４　Fig.30

SK－42の北に隣接して検出した土坑である。後世のピット、攪乱坑に切られ残りが悪い。平面プランはほぼ円形になるものと見られ、径は1.5m程度、深さ0.65mを測る。土坑底面は円形に平坦面をもつ。弥生後期の土器片・古墳時代前後期の土師器片が124点、須恵器片が７点出土した。

ＳＫ－４４出土遺物　Fig.31

61は土師器の甕形土器で、頸部から胴部上半にかけての破片である。外面は横位の平行叩きの後、刷毛目調整を加え、内面は刷毛目を施した後、ヘラ削りする。口縁部は横ナデ。胎土には多量の砂粒と少量の雲母粒を含む。胴部小片のため法量は不正確である。62は須恵器蓋坏である。身の小片にすぎない。63、64は叩き目を持つ土師器である。63は外面は凝格子叩き、内面は刷毛目調整で、明橙色を呈す。64は外面凝格子叩き、内面はアテ具痕を刷毛目でナデ消し、暗褐色を呈す。

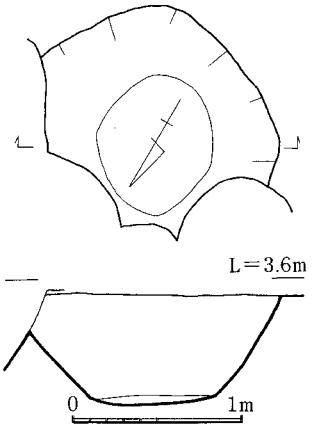


Fig.30　ＳＫ－44実測図（1/40）

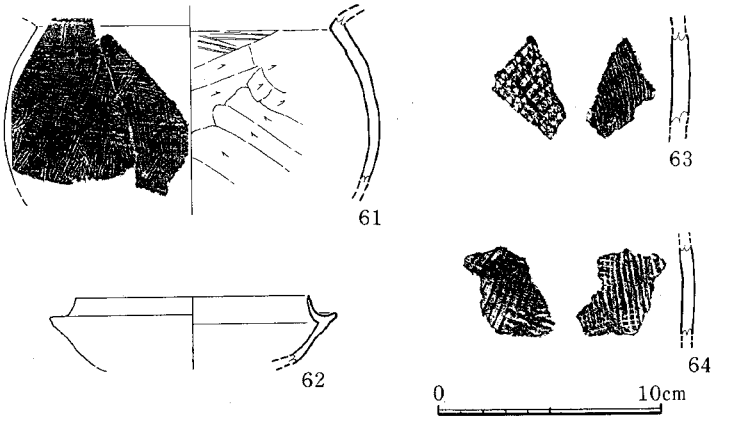


Fig.31　ＳＫ－44出土遺物実測図（1/3）

ＳＫ－４９　Fig.32

SK－44の北約２ｍに検出した土坑である。攪乱坑と後世のピットに切られて残りが悪い。また、北端の一部をSK－56に切られる。平面プランは東西にやや長い楕円形を呈し、長径1.5ｍ、短径は1.2ｍ前後、深さ0.65ｍを測る。土坑底面は南に向かって段状に深くなる。弥生土器・土師器片が55点、須恵器片が３点出土した。

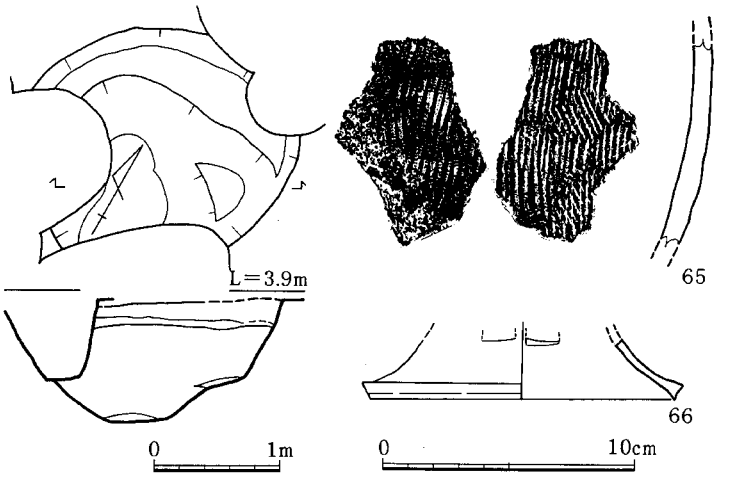


Fig.32 ＳＫ－49実測図(1/40)　Fig.33 ＳＫ－49出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－４９出土遺物　Fig.33　PL.８

65は土師器である。壺の胴部片か。外面は凝格子文様の叩き、内面は平行線文のアテ具痕が残る。暗橙褐色～暗褐色を呈する。66は須恵器の高坏である。脚端部の小片で、端部を断面三角形に肥厚させ、面取りをする。透孔の部分から割れている。

ＳＫ－５６　Fig.34

SK－49の北に隣接し、SK－49の一部を切る土坑である。攪乱坑や後世の土坑に切られており、その一部を確認したに留まる。南北に溝状に長い土坑で、短径は0.6ｍ、深さ0.1ｍを測る。土師器片が23点、須恵器片が１点出土した。

ＳＫ－５６出土遺物　Fig.35　PL.８

67は土師器の高坏である。脚部は欠損する。内傾する底部からわずかに屈曲して口縁部が立ち上がる。口縁端部は丸い。外面は刷毛目調整で、屈曲部と下端部に横ナデを加える。内面は口縁部に刷毛目調整、底部にナデ調整を施す。口縁端部の横ナデは最後に行われている。所々器面が剝がれており、頻繁に使用したものか。68は叩き目を持つ土師器である。球形をなす胴部の破片である。外面に凝格子叩き、内面に弧状のアテ具痕が残る。暗橙色を呈する。69は須恵器の蓋坏である。薄手の蓋で、口縁端部は丸い。天井部には回転ヘラ削りを加える。ロクロ回転は逆時計回りである。外面に薄く自然釉をかぶる。

ＳＫ－６９　Fig.36

調査区の北東よりに検出した土坑である。南側の一部を攪乱坑に切られている。平面プランは東西に少し長い楕円形を呈し、長径1.2ｍ、短径1.0ｍを測る。深さは0.4ｍで、底面は平坦面をなす。

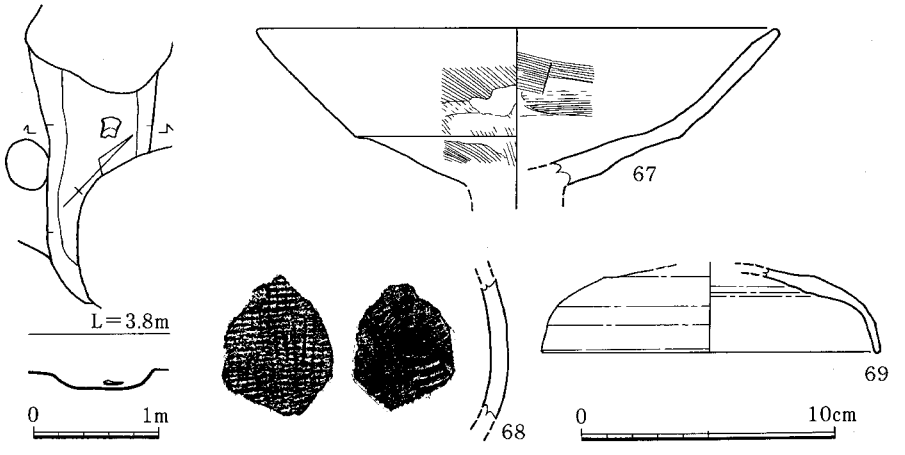


Fig.34 ＳＫ－56実測図(1/40)　Fig.35　ＳＫ－56出土遺物実測図（1/3)

底面の西端に深さ0.1mの小さなピットを掘る。土師器片が17点、須恵器片が2点出土した。

SK－69出土遺物　Fig.37　PL.8

70は土師器の甑である。把手はヘラ成形による。甑本体は、胴部外面に刷毛目調整、内面にヘラ削りを施している。71は須恵器の蓋坏である。身の口縁部の小片で、口縁端部は丸い。外面下半には回転ヘラ削りを加えている。ロクロ回転は時計回りである。

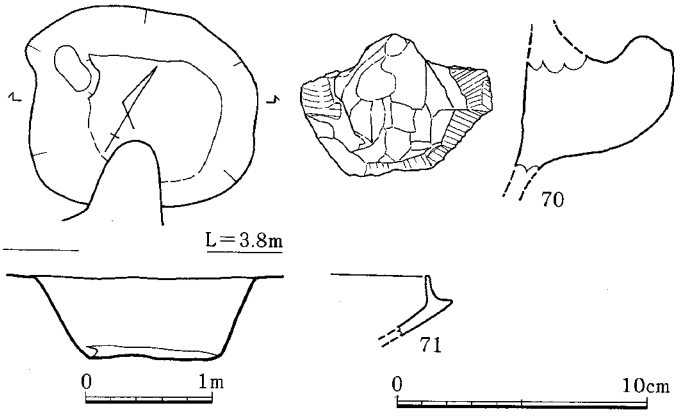


Fig.36 SK－69実測図(1/40)　Fig.37　SK－69出土遺物実測図（1/3）

SK－70　Fig.38

調査区中央の東よりに検出した土坑である。他の土坑に切られる。平面プランはほぼ円形を呈し、円筒形に掘る。径1.15m、深さ0.55mを測る。土坑底面の西端に0.3mのピットがある。土師器片が9点、須恵器片が2点出土した。

SK－70出土遺物　Fig.39

72は須恵器の甕である。胴部の小片で、内面には同心円文のアテ具痕がある。外面には焼成時に被った灰が厚く融着している。

SK－72　Fig.38

SK－70の北3mに位置する土坑である。北側を攪乱坑に大きく切られる。平面プランは南北にやや長い楕円形を呈し、長径は1.7m以上、短径は1.2m、深さ0.65mを測る。土坑南壁際にピットがある。土師器片が8点、須恵器片が2点出土した。

SK－72出土遺物　Fig.39

73は須恵器の蓋坏である。蓋であろう。かえりが幅広く、口縁端部の立ち上がりは低い。外面には自然釉を被っている。小片のため法量は不明。74は叩き目を持つ土師器である。外面は平行叩きの後、刷毛目調整を加える。内面には弧状で幅広のアテ具痕が明瞭に残っている。橙褐色を呈する。

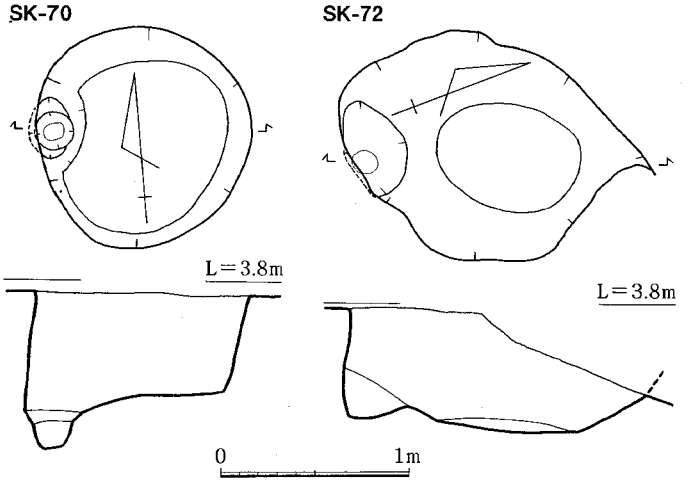


Fig.38　SK－70、72実測図（1/40）

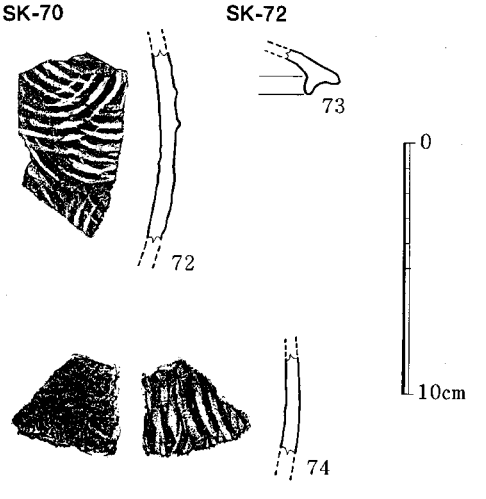


Fig.39　SK－70、72出土遺物実測図（1/3）

4．古代・中世の遺構と遺物

(1)竪穴状遺構

竪穴住居跡様のプランを呈するが、柱穴等の屋内施設を検出できず、住居跡とするには疑問が残るため竪穴状遺構として報告する。2基検出した。いずれも古代の遺構であろう。

ＳＣ－２０　Fig.40　PL.4

調査区中央の南壁際に検出した遺構である。極めて浅い遺構で、他の遺構との切り合いが把握できなかった。東側では古墳時代前期の竪穴住居跡SC－39を切るが、検出時に切り合いを把めず、同時に下げた。また西側でも古代の溝SD－21との切り合いを把めていない。従って、プランが確認できたのは北側および南側の極く一部のみである。南北3.2m、東西3.5m以上の方形プランの遺構か。床面には、南よりに平面楕円形の土坑一つと、北よりにピット3つがあるが、主柱穴をなすものはない。貼床、焼土等はない。

弥生土器・土師器片が307点、須恵器片が7点出土した。SC－39の遺物が含まれており、量的には古式土師器が大半を占めるが、古代の遺構と考えられる。

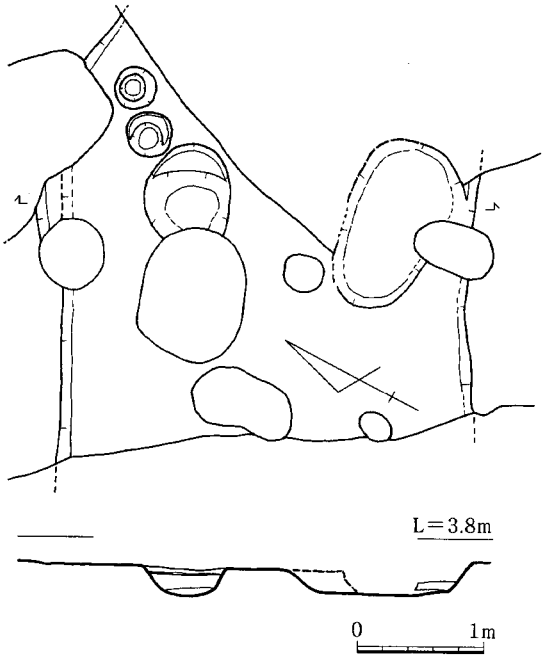


Fig.40　ＳＣ－20実測図（1/60）

ＳＣ－２０出土遺物　Fig.41　PL.8

75～80は古式土師器である。75は甕形土器の口縁部片で、内湾気味に開き、端部は面取され内側へ突出する。横ナデ調整。胎土に雲母粒を多量に含む。76も甕形土器の口縁部片である。直線的に開き、端部を面取りする。

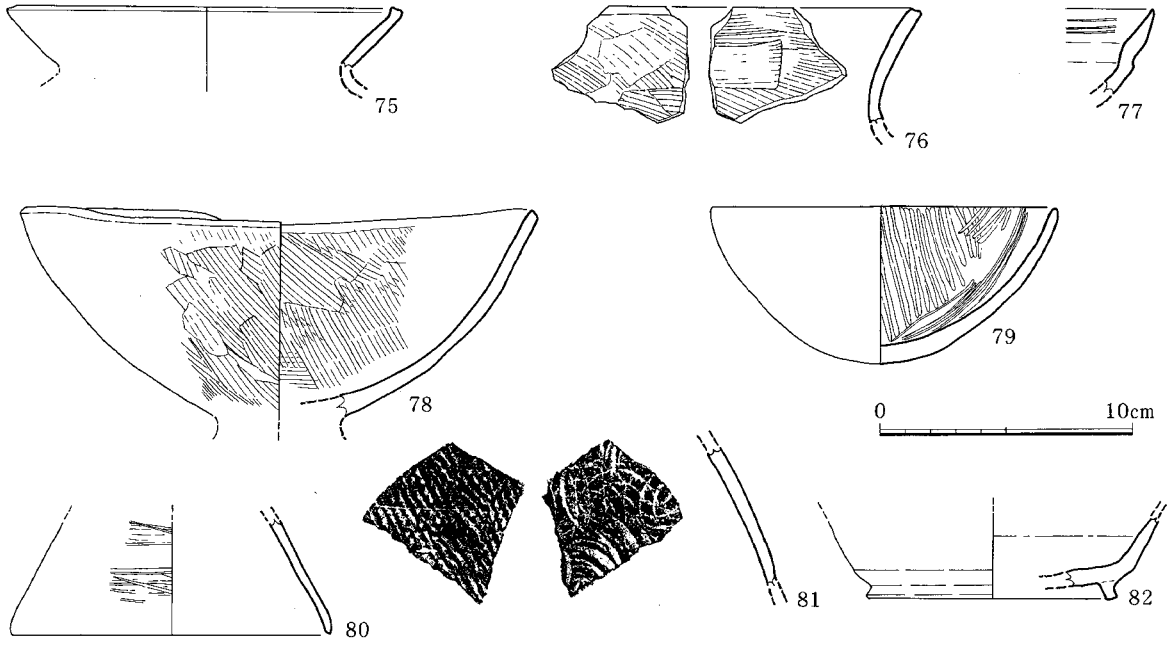


Fig.41　ＳＣ－20出土遺物実測図（1/3）

内外面とも刷毛目調整で、外面は一部ナデ消す。77は小型丸底土器の口縁部小片で、内外面とも横ナデの後、粗いヘラ磨き。78は鉢型土器で、脚が付く。内外面とも刷毛目調整で、口縁端部は横ナデ。79は小型の鉢である。外面が丁寧なナデ、口縁から内面にかけて横ナデした後、内面に暗文を施す。80は小型器台の脚であろう。横ナデ調整後、外面に粗いヘラ磨きを加える。

81は土師器の壺か。外面に縄蓆文叩き、内面に同心円文のアテ具痕が残り、外面に横沈線が入る。

82は須恵器坏である。低く丸みのある高台を底部外縁に貼付する。

ＳＣ－２５ Fig.42 PL.4

調査区中央の北壁際に検出した遺構である。北側は調査区外に伸びる。溝SD－21を切る。平面プランは隅丸方形をなし、東西4.1m、南北は3.5m以上、深さ0.15mである。床面の南東よりに検出した土坑は南北に長い楕円形プランを呈し、長径1.9m、短径0.9m、深さ0.1mである。床面にピット３つがあるが、いずれも浅く、主柱穴と見なし難い。貼床、焼土等は検出できなかった。

弥生土器・土師器片が298点、須恵器片が20点出土した。古代の遺構と考えられる。

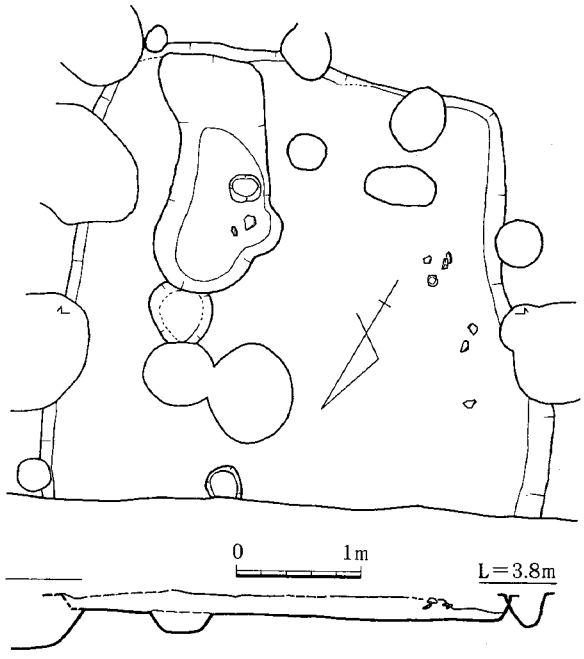


Fig.42 ＳＣ－25実測図（1/60）

ＳＣ－２５出土遺物 Fig.43 PL.8、10

83、84は弥生土器である。83は甕形土器の口縁部片で上面に赤色顔料を塗布する。84は底部片で、外面刷毛目、内面ヘラナデ、底部ナデ調整。

85、86は古式土師器である。85は甕形土器の口縁部片。直線的に開く口縁で、端部は面取りし浅く窪む。横ナデ調整。86は小型丸底土器で、横ナデ後、外面に雑なヘラ磨きを加える。

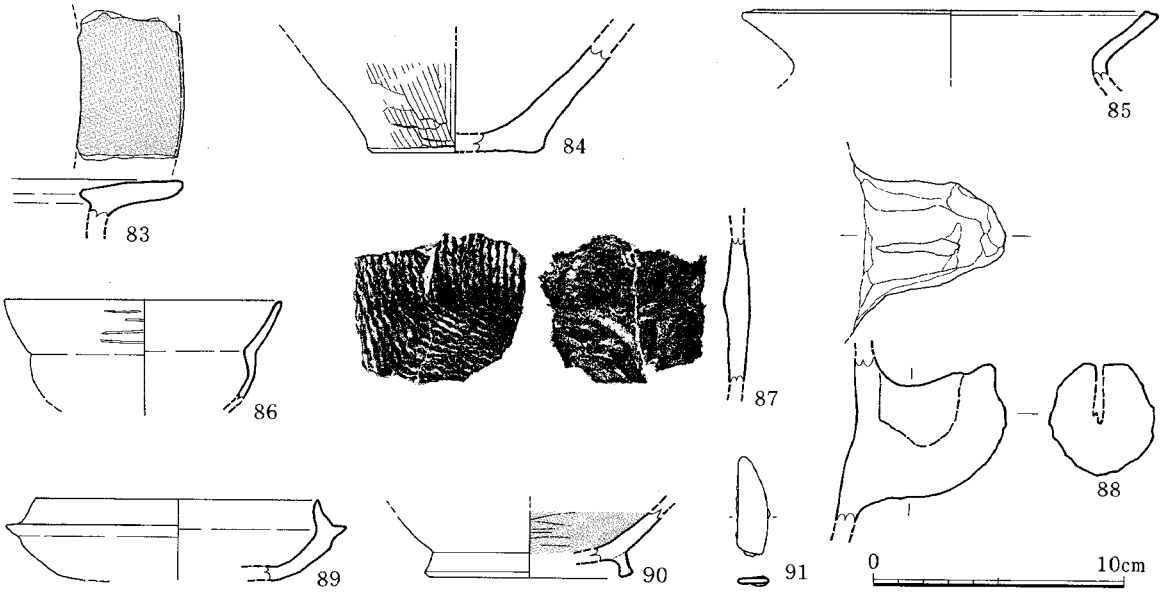


Fig.43 ＳＣ－25出土遺物実測図（1/3）

87は土師器片で、外面縄席文叩き、内面同心円文のアテ具痕をナデ消し。88は土師器甑で、把手はヘラ成形し、上から切り込みを入れる。内面はヘラ削り。89は須恵器蓋坏の小片である。端部は尖り気味に丸い。焼き歪みがあって、外面に灰を被る。90は内器面に炭素を吸着させた黒色土器A類の椀である。内面を粗くヘラ磨きする。91は鉄製品である。製品ではなく、鍛造用の鉄片か。

(2)掘立柱建物

掘立柱建物は2棟復元したが、他にも多数の柱穴を検出しており、復元できなかった建物があるものと思われる。

ＳＢ－７３　Fig.44

調査区の北半部に検出した掘立柱建物である。調査時には柵列と考えたが、その後4間×1間の建物に復元した。東西に長く、桁行方位はＮ－65°－Ｅにとる。桁行全長は7.54ｍを測り、柱間は東から1.6、2.0、2.24、1.7ｍで、東から3番目までの柱間に束柱を入れる。梁行は1.75ｍを測る。柱穴の掘り方は円形プランで、径22～70㎝、深さ10～55㎝である。柱穴からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。量的には古式土師器が最も多いが、古代の遺構であろう。

ＳＢ－７３出土遺物

Fig.45　PL.8

92、93は弥生土器である。92は壺形土器の頸部片で、断面台形の突帯を貼付し、板小口で刻目を入れる。内外面刷毛目調整で、突帯部分を横ナデする。93は底部片で、外面は粗い刷毛目、内面ナデ調整である。

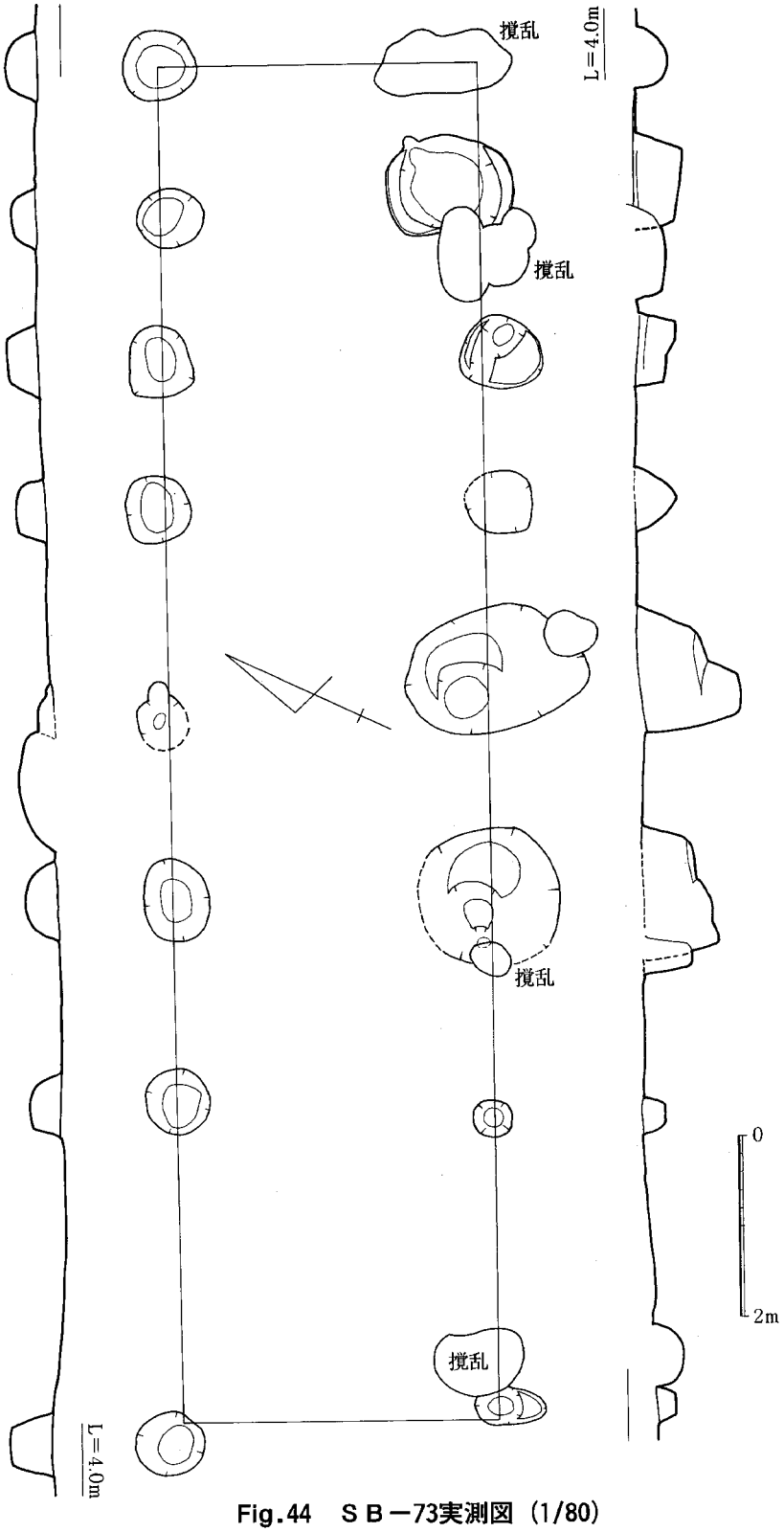


Fig.44　ＳＢ－73実測図（1/80）

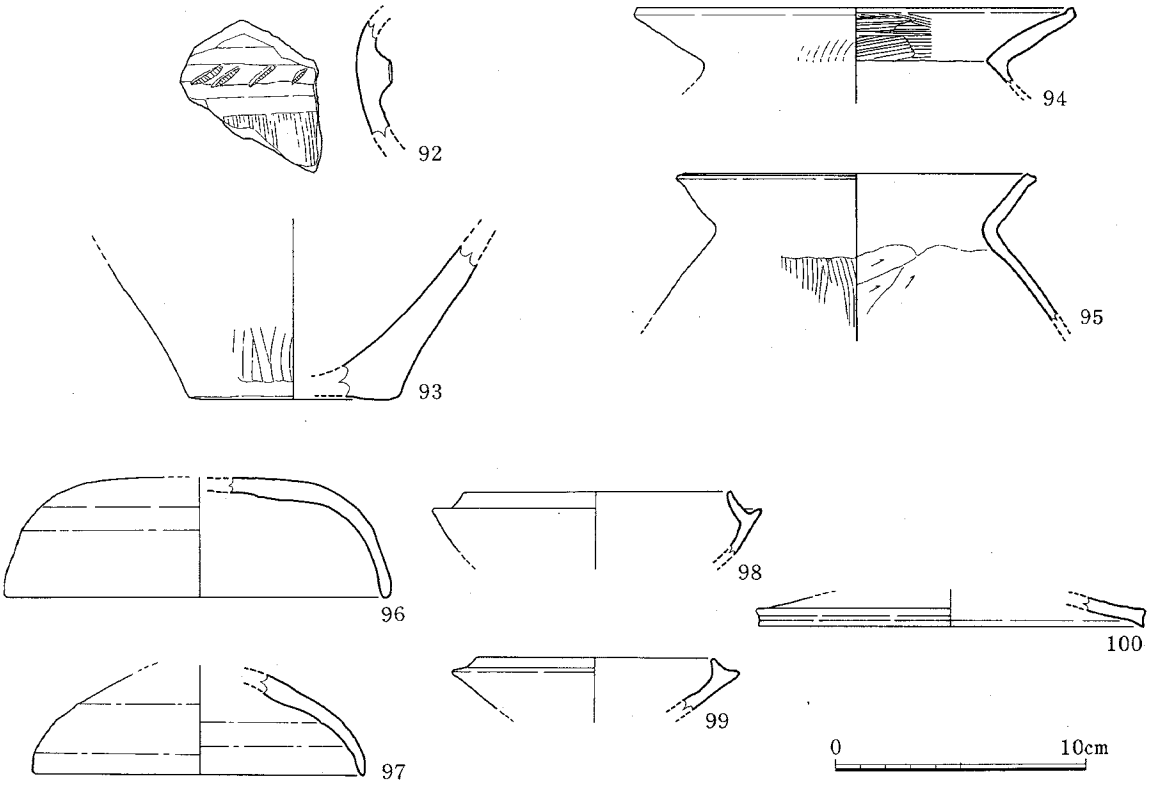


Fig.45　ＳＢ－73出土遺物実測図（1/3）

94、95は古式土師器で、ともに甕形土器である。94の口縁は直線的に開き、端部を上につまみ上げる。外面は刷毛目の後横ナデ、内面は横ナデの後刷毛目を加える。胴部内面はヘラ削り。95は口縁が内湾気味に開き、端部は面取り。胴部外面は刷毛目、内面はヘラ削り。口縁部は横ナデする。

96～100は須恵器である。96は蓋で、端部は丸い。ロクロ回転は時計回りで、天井部に回転ヘラ削りを加える。外面に薄く自然釉がかかる。97はやや小こぶりの蓋で、端部は丸い。ロクロ回転は逆時計回りで、天井部にヘラ削りを施す。98は坏身で、口縁は内傾し、端部は丸い。ロクロ回転は逆時計回りで、外面に自然釉をかぶる。99はこぶりの坏身で、口縁は短く内傾する。ロクロ回転は時計回り。100は蓋の小片である。端部は面取りされ、下方へ少し突出する。ロクロ回転は逆時計回り。外面に薄く自然釉が被る。

ＳＢ－７５　Fig.46

SB－73の南側に検出した。調査区内で柱穴３つが並んでおり、南側が調査区外へ伸びる掘立柱建物に復元した。主軸方位はＮ－57°－Ｅにとる。全長は1.89ｍを測り、柱間は東から0.93ｍ、0.96ｍである。柱穴の掘り方は円形プランで、径30～46㎝、深さ36～54㎝である。柱穴からは弥生土器、土師器、須恵器が少数出土した。古代の遺構と考えたが、古墳時代後期に遡る可能性もある。

ＳＢ－７５出土遺物　Fig.47　PL.８

101は土師器の小片で、外面には縄席文叩きがある。内面は太い同心円文のアテ具痕が残る。

102～104は須恵器である。102は蓋坏の身で、口縁は内傾し、端部は尖り気味。ロクロ回転は逆時計回り。103は無蓋の坏で、体部は丸い。ロクロ回転は逆時計回りで、内底をナデ、外底をヘラ削りする。外底にヘラ記号の一部が残る。104は小壺もしくは甕か。胴部の小片で、櫛描き波状文と沈線を入れる。ロクロ水引きの後、内面を指で押さえながら外面の一部をナデている。

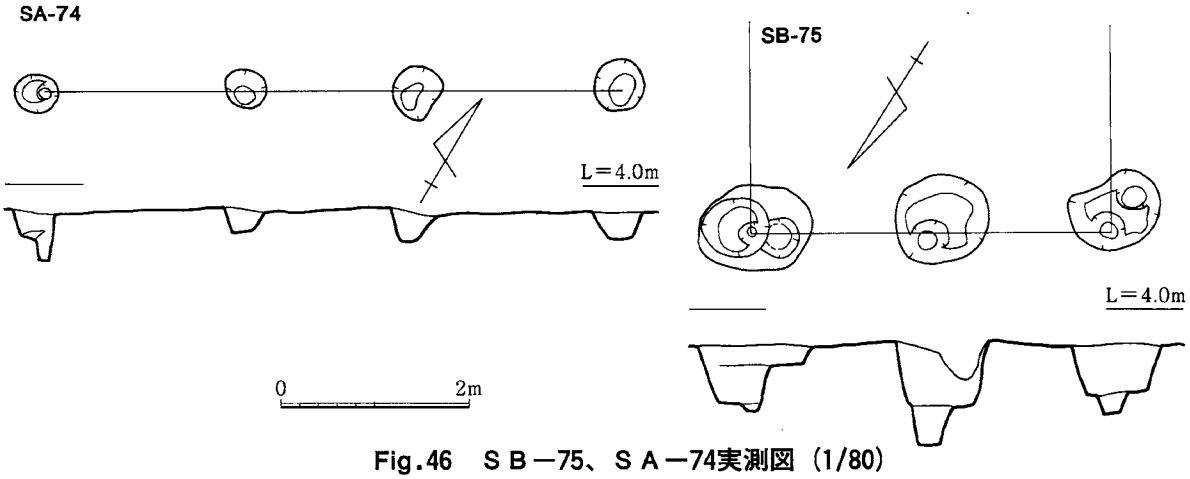


Fig.46　ＳＢ－75、ＳＡ－74実測図（1/80）

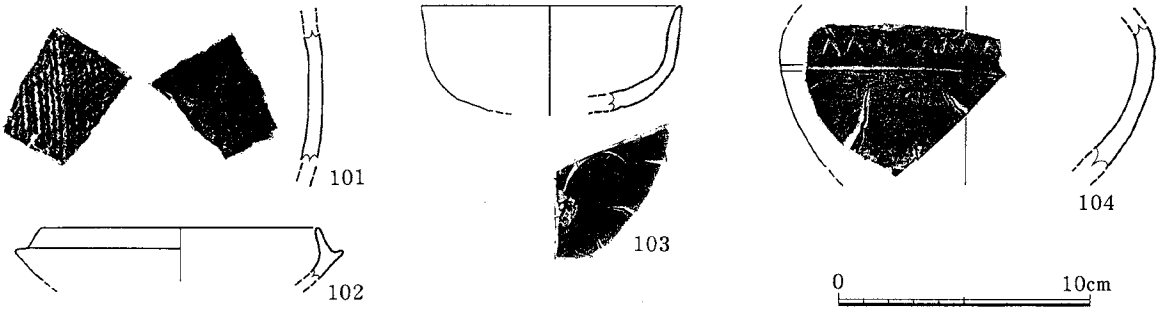


Fig.47　ＳＢ－75出土遺物実測図（1/3）

ＳＡ－７４　Fig.46

SB－73とSB－75の間に検出した。掘立柱建物に含めたが、柵列と見られる。調査区内で柱穴４つが並んでいる。主軸方位はＮ－59°－Ｅで、SB－75と方向が等しく、関連する遺構の可能性もある。全長は3.05ｍを測り、柱間は東から1.13ｍ、0.88ｍ、1.04ｍである。柱穴の掘り方は円形プランで、径23～30㎝、深さ12～25㎝である。柱穴からは弥生土器、古式土師器が少数出土したが、図示できるものはない。SB－75に近い時期の遺構であろう。

(3)溝状遺構

ＳＤ－２１　Fig. 5

調査区中央を南北に横断する溝である。古代の竪穴状遺構SC－25に切られる。基底面は南へ下り、断面形は浅皿状を呈し、深さは0.2～0.3ｍ。遺物は弥生土器・土師器片が197点、須恵器片が５点出土した。古代の遺構と思われる。

ＳＤ－２１出土遺物　Fig.48　PL. 8

105、106は古式土師器で、遺構の時期を示す遺物ではない。105は小型の浅い鉢である。ヘラ磨きは内面が雑、外面は丁寧である。底部内外面はヘラナデ。106は高坏である。外面は刷毛目の後、ヘラ磨き、内面は逆時計回りに刷毛目調整を施す。

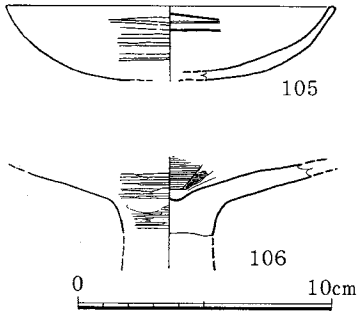


Fig.48　ＳＤ－21出土遺物実測図（1/3）

ＳＤ－４０　Fig. 5

調査区の南西隅に検出した遺構で、一部を確認したのみである。東

西方向の溝状遺構で、古墳時代前期の土坑SK－41を切っている。断面形は深さ0.1mのU字形を呈する。遺物は土師器片37点、須恵器片5点が出土したが、細片のため図化できるものはない。古代の遺構に含めたが、古墳時代後期に遡る溝の可能性もある。

(4)井戸

井戸は計5基を検出した。うち、SE－05は近世の井戸であるため説明を省いた。4基のうち、1基は古代、他の3基は中世の井戸と見られる。

SE－04　Fig.49　PL.5

調査区東端部に検出した井戸である。平面プランはやや南北に長い円形を呈し、長径2.25m、短径2.0mを測る。断面形はスリ鉢状をなし、検出面から基底までの深さは1.05mである。基底面は径0.4mの円形に小さな平坦面をつくる。井戸側は検出できなかった。また、調査時には湧水は見られなかった。

出土遺物は、土師器片81点、須恵器片15点、瓦器片1点である。中世の遺構であろう。

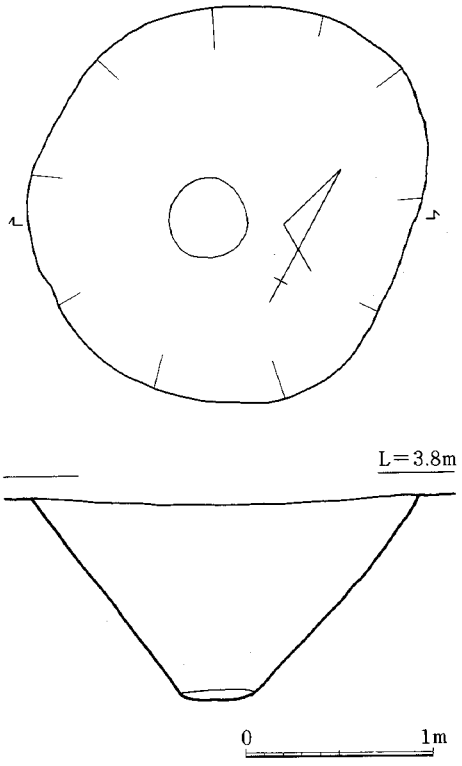


Fig.49　SE－04実測図（1/40）

SE－04出土遺物　Fig.50　PL.8

107は土師器の椀である。深い器形をなし、口縁はやや外反する。高台端部から底部にかけて欠損する。外面は横ナデ調整で、口縁外面から内面全体にヘラ磨きを施す。内底のヘラ磨きは単位が明瞭でない。108は瓦器椀である。高台が剝落している。底部は非常に薄い。内外面に指頭痕があり、これをナデ消している。

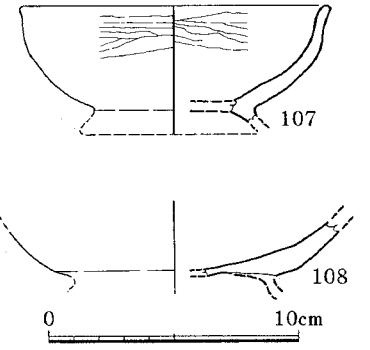


Fig.50　SE－04出土遺物実測図（1/3）

SE－30　Fig.51　PL.5

調査区北西の壁際に検出した井戸である。調査区を拡張して調査を行った。平面プランはやや東西に長い円形を呈し、長径2.1m、短径2.0mを測る。断面形はスリ鉢状をなし、基底は一段抉って水溜めをつくる。検出面から基底までの深さは1.3mである。基底面は径0.4mの円形に小さな平坦面をつくる。井戸側は検出できなかった。また、調査時には湧水は見られなかった。

出土遺物は、土師器片775点、須恵器片138点、陶磁器片8点の他、近世の陶磁器が2点混入している。中世の井戸と考えられる。

SE－30出土遺物　Fig.52　PL.8、10

109～112は土師器である。109は椀の口縁部片で、端部はやや外反する。外面から口縁部内面にかけてヘラによる横ナデ調整で、内面は丁寧にヘラナデ調整を加える。暗橙色を呈する。110は椀の底部片である。高台を貼付する。111、112は内面に炭素を吸着させた黒色土器A類である。内面は密にヘラ磨きされ、光沢がある。外面は横ナデ後、高台を貼付する。

113～115は瓦器である。113、114は坏で、113はナデ調整後、内面に雑なヘラ磨きを加える。114は

内面は丁寧なヘラ研磨、外面下半はヘラ削り、口縁内外は横ナデ調整である。114は土師器である可能性もある。115は底部片である。内外ナデ調整で、低く丸い高台を貼付し、横ナデする。

116、117は須恵器の蓋である。つまみが付いており、116は宝珠状、117は柱状を呈する。

118～121は陶磁器である。118は白磁椀の口縁部片で、端部は玉縁状に肥厚する。外面はヘラ削り。白色で密な胎土に、淡い緑味のある透明釉をかける。貫入がある。119は白磁の小片である。口縁の一部で、端部に平坦面を持つ。胎土は白色で密。釉は黄味のある透明釉で、細かい貫入がある。120は青磁の小片である。端部が外反する口縁部で、胎土は灰緑色で砂粒を含む。光沢のある透明釉を全体に施す。121は龍泉窯系の青磁で、椀の一部であろう。口縁の小片で、端部は薄く肥厚する。外面に片切り彫りで蓮弁文を施す。胎土は灰白色で密。淡い緑色釉を厚くかける。

122、123は土錘である。紡錘形を呈し、上下両端を僅かに欠く。

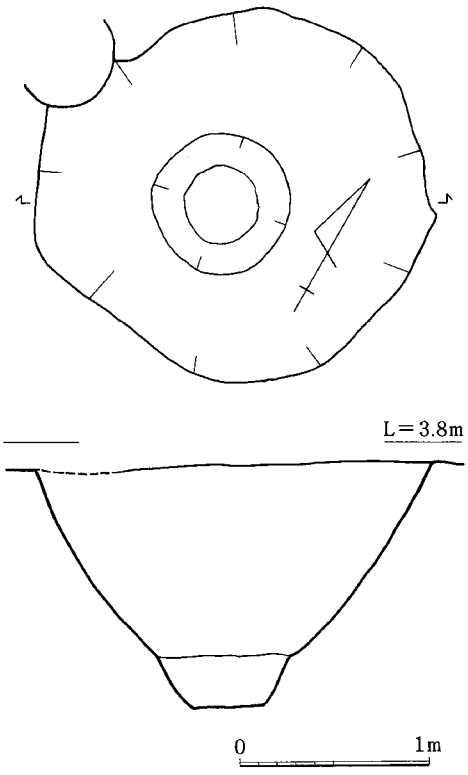


Fig.51　ＳＥ－30実測図（1/40）

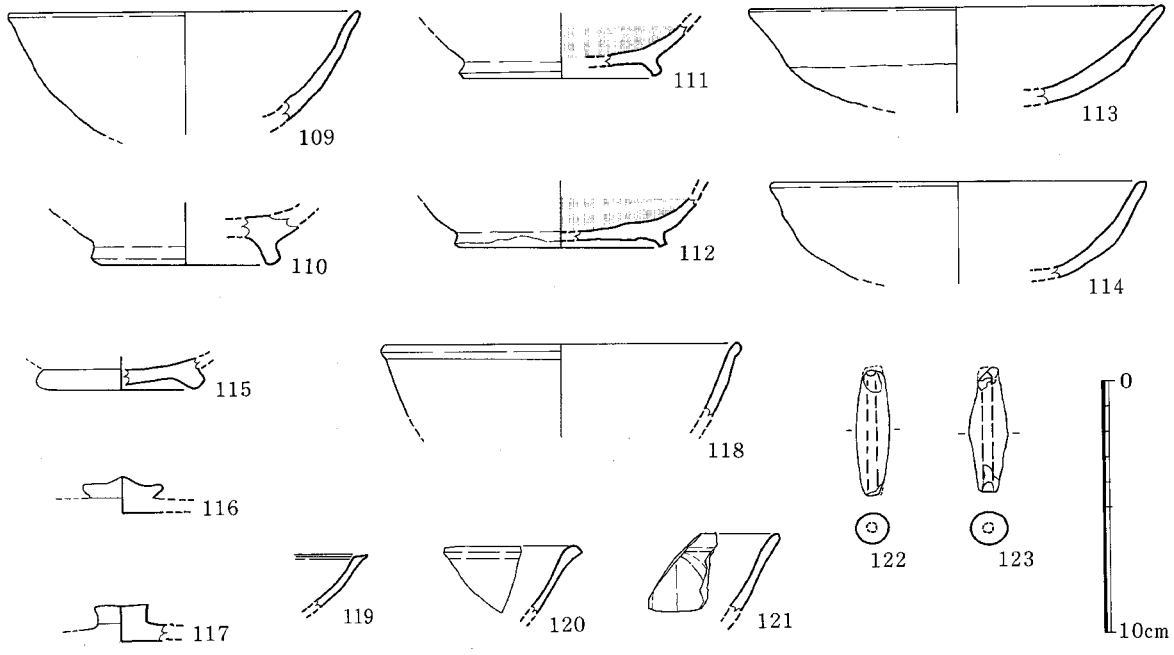


Fig.52　ＳＥ－30出土遺物実測図（1/3）

ＳＥ－６４　Fig.53　PL. 6

調査区西端部に検出した井戸である。調査区を拡張して調査したが、掘り方の一部は区外に及ぶ。掘り方は東西にやや長い円形プランを呈し、長径1.8ｍを測る。断面形はスリ鉢状で、さらに基底を段状に２回掘り窪めている。検出面から基底部まで1.15ｍを測り、基底面は径0.4ｍの円形の平坦面をなす。井戸側は検出できなかった。また、調査時には湧水は見られなかった。

弥生土器・土師器片が312点、須恵器片が28点、陶磁器片が２点出土した。12世紀後半～13世紀初

頭の遺構であろう。

ＳＥ－６４出土遺物　Fig.54　PL.９、10

124は古式土師器の甕形土器で、頸部から胴部上半にかけての破片である。外面は胴部が刷毛目調整、頸部は横ナデ後櫛状具で波状文を加える。内面は胴部ヘラ削りで、頸部は指頭痕を横ナデして消している。

125は内面に炭素を吸着させた黒色土器Ａ類である。薄手の椀で、高台は低く断面三角形をなす。外面は横ナデ後一部雑にヘラ磨きを加え、内面は細かいヘラ磨きを施す。畿内系の搬入土器か。

126～128は土師器である。126、127は土師器小皿で、ロクロ成形後、内底をナデ、底部を回転ヘラ切りする。128は坏で、体部は丸みを持ち、底部は回転糸切りし、板圧痕が残る。内底にはナデを施す。復元口径は15.4㎝となる。

129は瓦器の小皿である。体部は丸みを持ち、底部は回転糸切りで板圧痕が付く。内面に軽くヘラ磨きを加える。ほぼ完存する。焼き歪みがあり、口径は10.2～10.6㎝である。

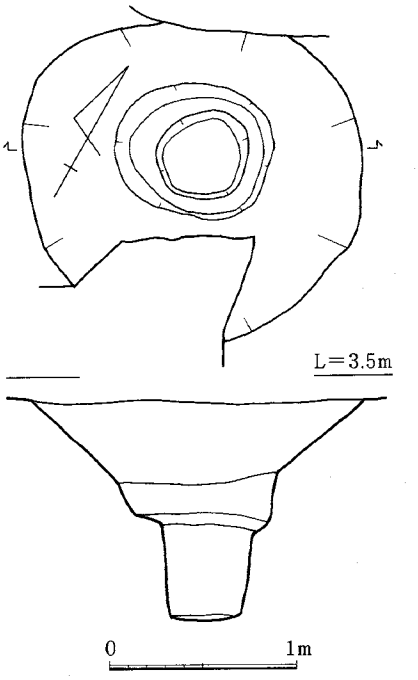


Fig.53　ＳＥ－64実測図（1/40）

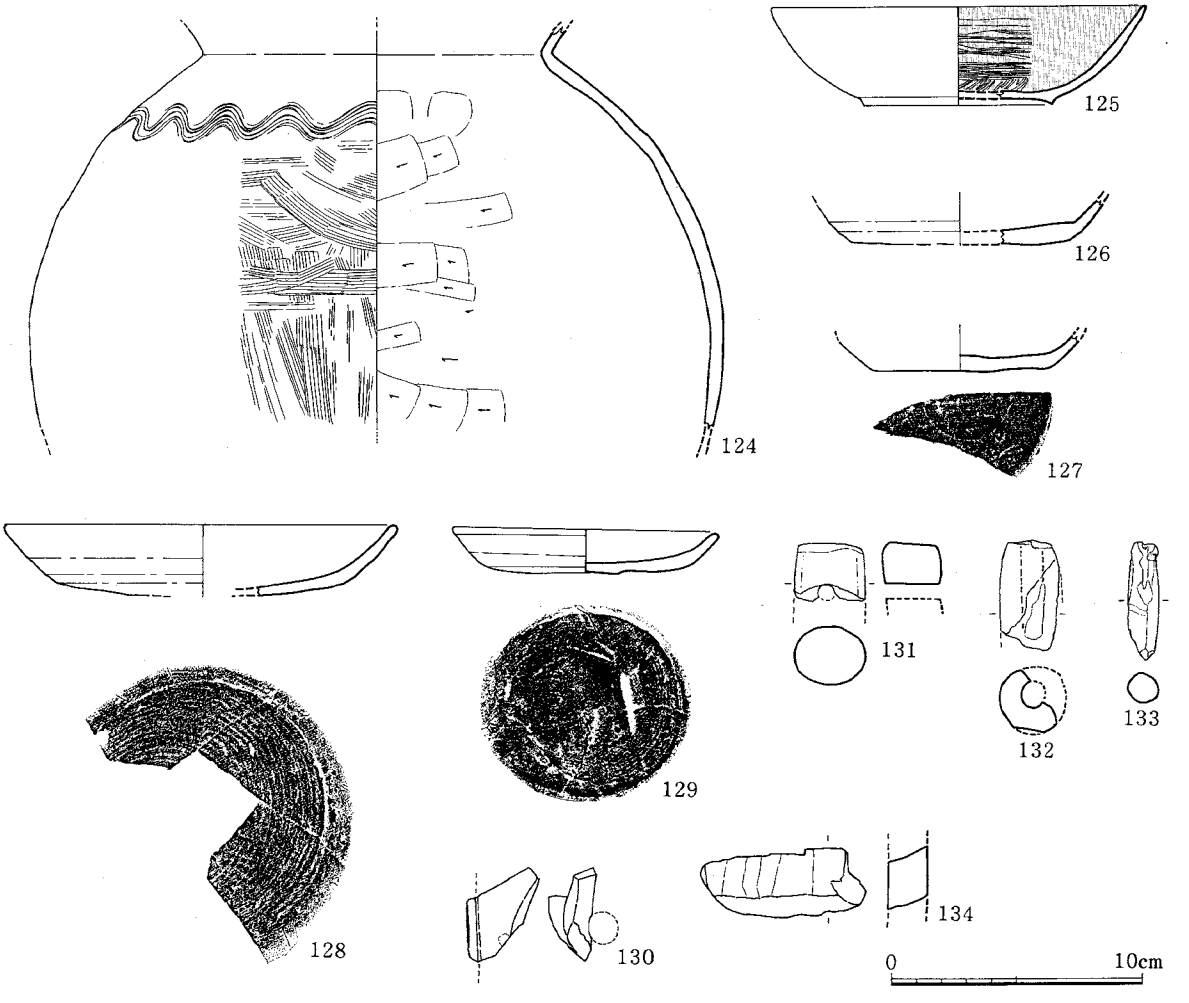


Fig.54　ＳＥ－64出土遺物実測図（1/3）

130は施釉陶器の注口である。胎土は砂粒を含み須恵質で淡灰色を呈し、淡い緑色を帯びた透明釉を薄く施す。

131、132は土錘片である。131は断面楕円形につくり、横から穿孔する。132は紡錘形を呈する。

133は石錘である。滑石を棒状に加工し、頭頂部を抉って紐掛かりとする。134は滑石製石鍋の小片である。

ＳＥ－６８ Fig.55 PL.6

調査区西端部に検出した井戸である。調査区拡張中に検出したため、更に広げて調査を行ったが、掘り方の一部は調査区外にある。土坑SK－65に切られる。掘り方は南北に長い隅丸方形と見られるが、規模は把握できていない。現況で、南北4.0m、東西３m弱を測る。この掘り方を0.5m下げた後、いったん平坦面をつくり、南寄りに井戸側を据えるための坑を掘っている。坑の掘り方は隅丸方形プランで、段状に掘削しており、基底面で径0.5mの隅丸方形をなす。井戸の検出面からこの基底部までの深さは1.35mを測る。井戸側は検出できなかった。調査時には湧水は見られなかった。

出土遺物の大半が掘り方から出土しており、土師器片209点、須恵器片２点がある。図示していないが、８世紀代の須恵器坏小片が含まれており、井戸の時期は古代に比定される。

ＳＥ－６８出土遺物 Fig.56 PL.9

135～138は弥生土器である。135は甕形土器の口縁部片で、口縁は逆Ｌ字形に屈曲し、口縁直下に断面三角形の突帯を巡らせる。胴部外面は刷毛目、他は横ナデ調整。136も甕形土器の口縁部小片で、「く」字形に屈曲して開く。胴部外面は刷毛目、内面ナデ、口縁は横ナデ調整。137は壺形土器の胴部片で、断面台形の突帯２条を貼付する。外面刷毛目、内面ナデ調整。138は底部片で、安定の悪い平底である。内外面とも刷毛目調整。

139～142は古式土師器である。139は甕形土器の口縁部片で、口縁が内湾気味に開き、端部は内側へ突出する。胴部内面ヘラ削り、口縁内外は横ナデ調整。140は小型の鉢で、内面に粗いヘラ磨きを施す。141は小型器台の口縁部片である。口縁は段をなして開く。横ナデ後、外面に粗いヘラ磨きを加える。142は高坏の脚

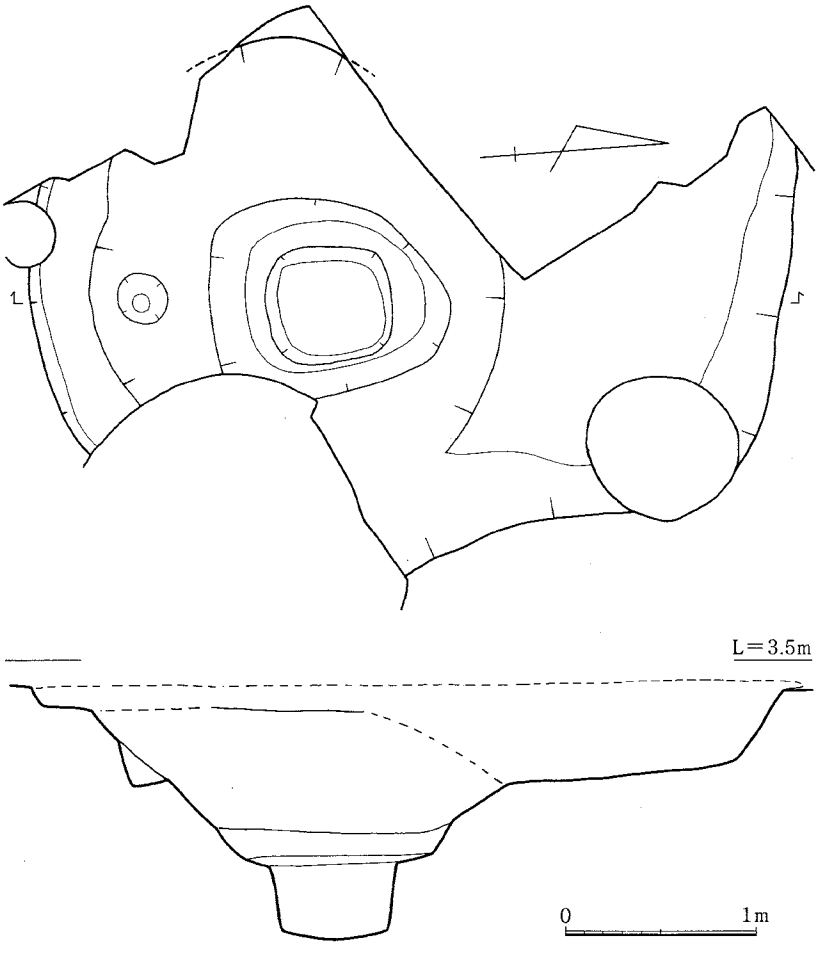


Fig.55 ＳＥ－68実測図（1/40）

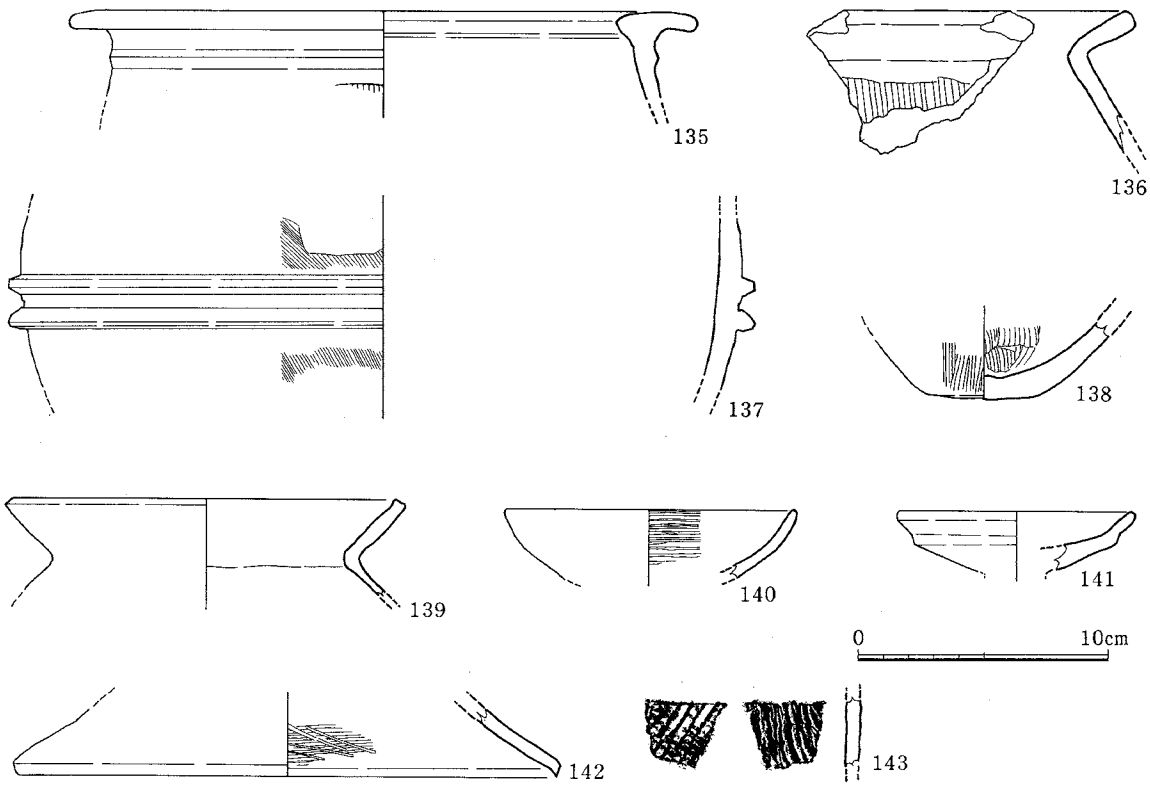


Fig.56　ＳＥ－68出土遺物実測図（1/3）

か。端部は下方へ突出する。外面はヘラナデ、内面は刷毛目の後、粗いヘラ磨きを加える。端部は横ナデ調整する。

143は土師器である。外面に凝格子叩き、内面はゆるい弧状のアテ具痕が残る。

(5)土坑

ＳＫ－１７　Fig.57

調査区の中央に検出した土坑である。西端を他の土坑に切られる。東西に長い不整な楕円形プランを呈し、長径2.1m以上、短径1.6m、深さ0.6mである。土師器片63点、須恵器片12点が出土した。図化していないが、高台の付く坏の小片が出土しており、古代の遺構と見られる。

ＳＫ－１７出土遺物　Fig.58

144は須恵器坏身の口縁部小片である。口縁はゆるく内傾外湾して立ち、端部は丸い。145は須恵器甕の口縁部片である。端部を面取りし、外面に沈線一条が巡る。146は須恵器甕の胴部片である。外面に凝格子叩き、内面に

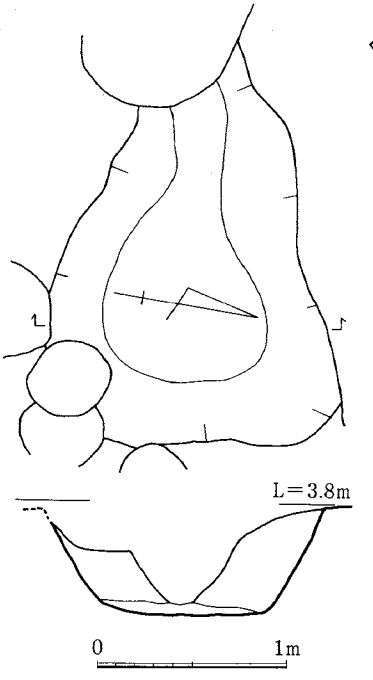


Fig.57　ＳＫ－17実測図（1/40）

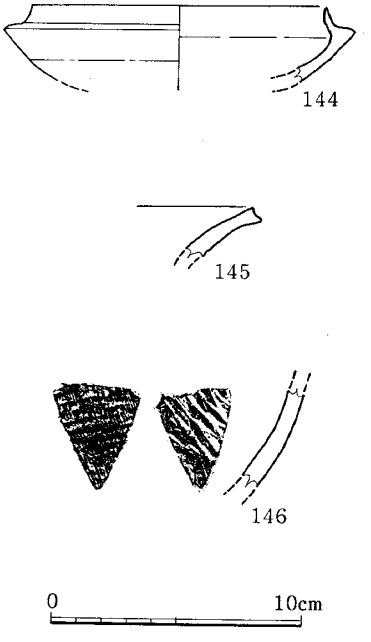


Fig.58　ＳＫ－17出土遺物実測図（1/3）

ゆるい弧状のアテ具痕が残る。

ＳＫ－４７　Fig.59

調査区南端付近に検出した土坑である。東側を攪乱坑に切られる。平面プランは東に開く不整な隅丸方形をなし、南北1.45m、深さ0.2mを測る。西側を段状に掘る。土師器片７点、須恵器片１点、白磁片１点が出土した。中世の遺構か。

ＳＫ－４７出土遺物　Fig.60

147は須恵器の蓋である。口縁部の小片で、口縁端部内面に沈線を入れる。復元口径は14.7cm。

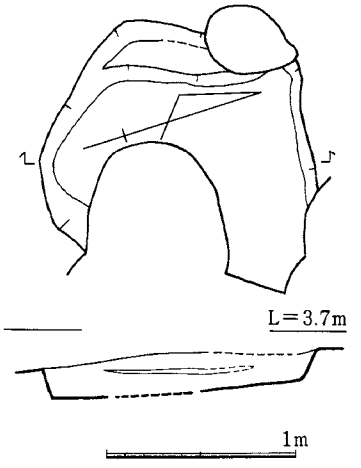


Fig.59　ＳＫ－47実測図（1/40）

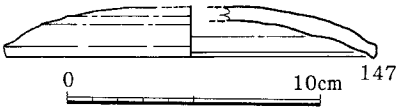


Fig.60　ＳＫ－47出土遺物実測図（1/3）

ＳＫ－５１　Fig.61

SK－47の西側に隣接して検出した土坑である。南北に長い不整な三角形プランである。長径1.2m、短径1.1m、深さ0.5mである。あるいは二つのピットの切り合いか。土師器片64点、須恵器片６点が出土した。中世の遺構か。

ＳＫ－５１出土遺物　Fig.62　PL.10

148は須恵器甕の胴部小片である。外面は板目の浮き出た平行叩き、内面は円弧文のアテ具痕をスリ消している。149は土師器の小片である。外面に板目の浮き出した平行叩き、内面にゆるい弧状のアテ具痕を残す。暗橙褐色を呈する。150は土錘である。紡錘形を呈し、完存する。他の土錘が出土した遺構は全て中世に属しており、当遺物も中世の産である可能性が高いと考えられる。

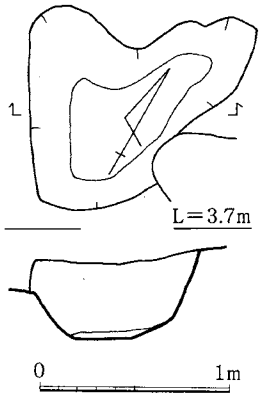


Fig.61　ＳＫ－51実測図（1/40）

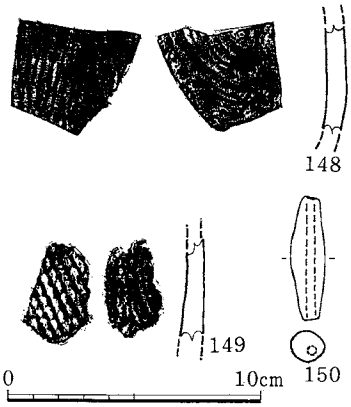


Fig.62　ＳＫ－51出土遺物実測図（1/3）

ＳＫ－６３　Fig.63

調査区の南西部に検出した土坑である。調査区内でその一部を調査したのみで、遺構の主要部分は区外にある。平面形は不明で、深さは0.6mである。あるいは井戸の掘り方か。弥生土器・土師器片が72点、須恵器片が10点出土した。古代の遺構か。

ＳＫ－６３出土遺物　Fig.64　PL.9

151は土師器の甕であろう。底部に近い部位の破片である。外面は器面があれているが凝格子叩きと思われる。内面は平行文のアテ具痕をナデ消している。暗橙褐色を呈する。152は製塩土器の小片である。内面に布目痕を持つ。外面はナデ調整。153は須恵器である。高坏の口縁部か。ロクロ成形後、外面下半に回転ヘラ削り、内面にナデ調整を加える。154は須恵器の甕である。底部に近い破片であろう。外面は平行叩きを施した後、ロクロを使ったナデ調整を加える。内面は短い平行文のアテ具痕を残す。

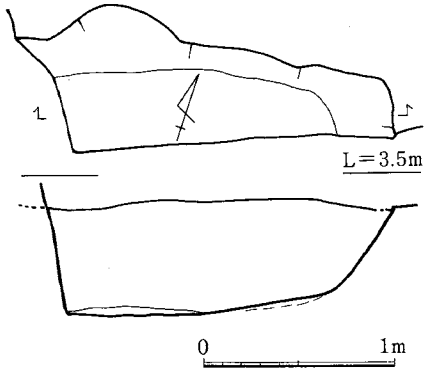


Fig.63　ＳＫ－63実測図（1/40）

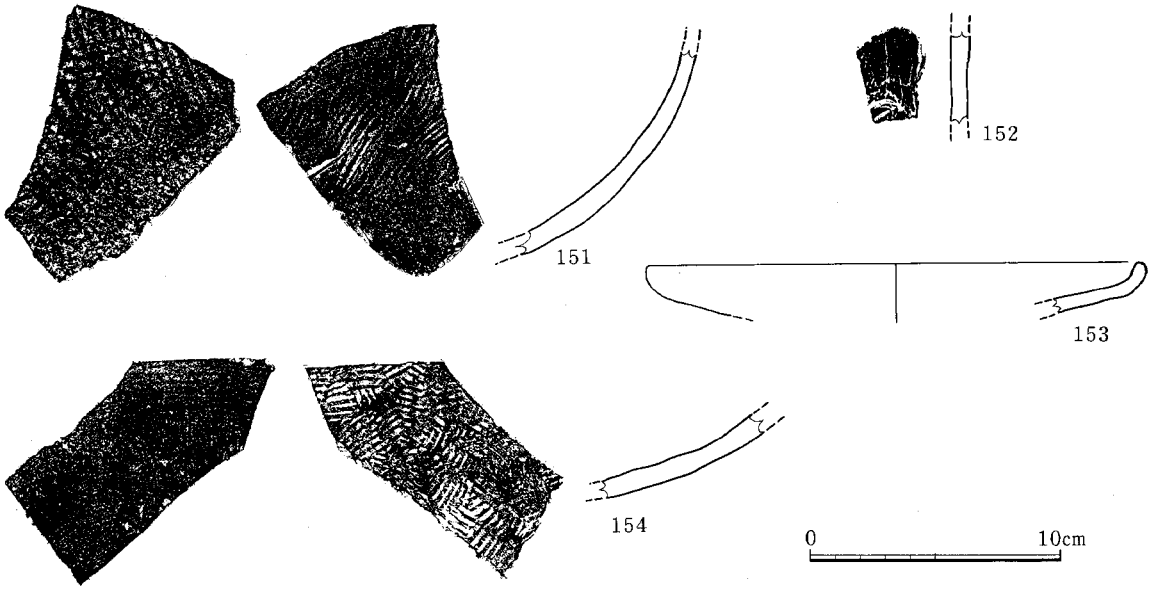


Fig.64　ＳＫ－63出土遺物実測図（1/3）

焼成が悪く、瓦質を呈する。

ＳＫ－６５　Fig.65　PL.6

調査区西端部に検出した土坑である。古代の井戸SE－68を切っている。東西に長い楕円形プランを呈し、長径1.8m、短径1.3m、深さ0.6mを測る。基底面でピット２つを検出した。弥生土器・土師器片が222点、須恵器片が５点、施釉陶器が１点出土した。古い時期の遺物が多く含まれるが、中世の遺構と見られる。

ＳＫ－６５出土遺物　Fig.66　PL.9

155は弥生土器である。甕形土器の口縁部片で、口縁端部は面取りされ、やや窪む。胴部は外面刷

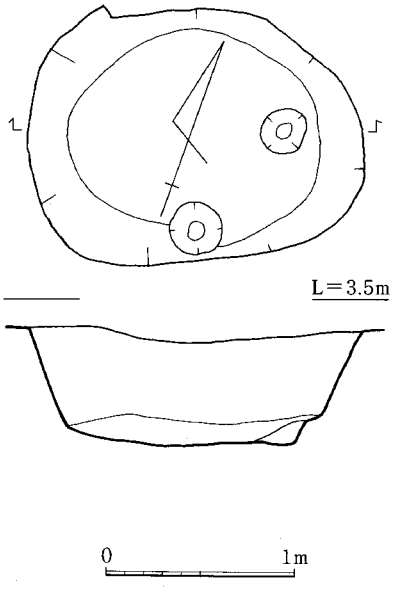


Fig.65　ＳＫ－65実測図（1/40）

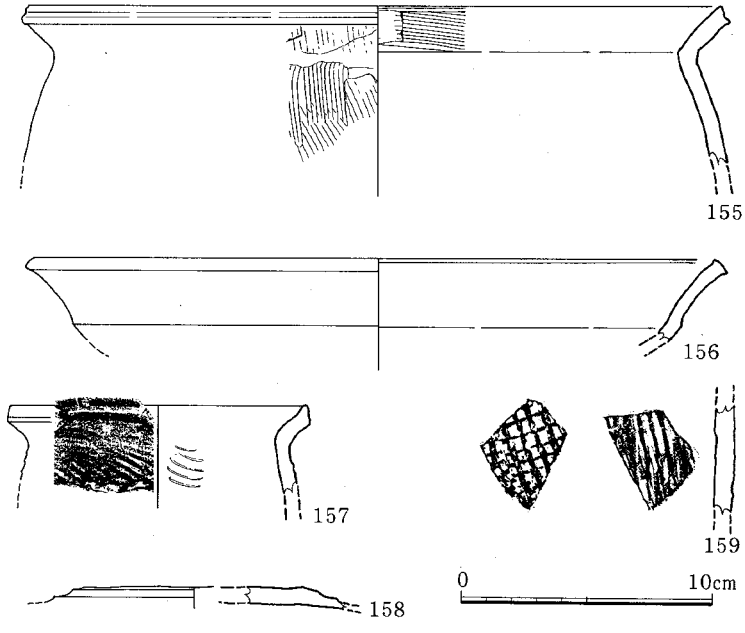


Fig.66　ＳＫ－65出土遺物実測図（1/3）

毛目調整、内面ナデ調整、口縁部は外面が刷毛目の後ナデ、内面は横位の刷毛目調整を施す。156は弥生土器の高坏である。口縁部の小片で、端部は面取りによりつぶれる。内面ナデ、口唇部内面から外面にかけて横ナデ調整である。157は土師器である。小型の甕であろうか。口縁端部を面取りする。胴部外面に平行叩き、内面にゆるい弧状のアテ具痕が残る。口縁内外は横ナデ調整である。外器面は残りが悪く、二次的な加熱を受けたものか。158は須恵器で、蓋か。ナデ調整で、外面の凹部は横ナデ調整。159は須恵器の小片である。甕の胴部片か。外面には凝格子叩き、内面にはゆるい弧状のアテ具痕が残る。

5．その他の出土遺物　Fig. 67　PL. 9、10

紙面の都合上、本文中に掲載できなかった遺構や、遺物包含層、ピット等から出土した遺物を取り上げる。

160、162～165は古式土師器である。160は甕形土器の口縁部片である。口縁端部は上方につまみ上げる。胴部外面は粗い刷毛目、内面はヘラ削り、口縁内面は刷毛目の後ナデ、口縁外面から口唇部にかけて横ナデ調整である。ピットから出土した。162は壺形土器の口縁部である。直線的に開き、端部でやや外反する。口縁部は刷毛目、横ナデ、刷毛目の順に調整を繰り返す。胴部内面はヘラ削り。包含層出土。163は高坏である。脚部を坏底に差し込んで接合しており、接合部から折れている。坏部は外面に段を持つ。調整は、全体を刷毛目調整した後、口縁内外と外面屈曲部を横ナデ、坏底の内外をナデ。内面に炭化物が付着し、外底は二次加熱により器面が剝落している。煮炊きに使用した可能性がある。包含層出土。164は小型器台である。脚は欠損する。内外をヘラ研磨する。包含層出土。165は鼓形器台か。かなり径が小さい。内面ナデ、端部内面から外面にかけては横ナデ調整である。包含層出土。

161、166、167は古墳時代後期の土師器である。161は甕形土器である。器壁が厚く、口縁は短く外反する。内面には粘土帯の痕をよく留める。胴部は外面が細かい刷毛目、内面が削り気味の雑なナデ、口縁内外は横ナデ調整である。表土から出土した。166は口広の甕形を呈し、ナデ肩で、口縁は緩く屈曲して短く開く。端部は面取りされ窪む。胴部外面に平行叩きを施した後、口縁内外を横ナデする。胴部内面は指頭痕、刷毛目、横ナデ、刷毛目の順に調整を重ねている。淡橙色を呈する。包含層出土。167は須恵器の形態・技法を模した土師器である。口縁と胴部は接合しないが同一個体と思われる。歪みがあるため図上では接合できない。口縁は外湾して開き、端部を面取りし、外縁に沈線を巡らす。口縁内外は横ナデ調整。胴部は、外面が平行叩きの後カキ目状に横ナデし、内面はゆるい弧状のアテ具痕を下半部のみ縦にナデ消している。淡橙～暗橙色を呈し、外面に黒斑が1ヵ所ある。包含層出土。

168～171は須恵器である。168は蓋である。口縁端部は丸い。ロクロは上から見て逆時計回りで、天井部に回転ヘラ削りを施し、ヘラ記号を加える。内面は一部ナデ調整。復元口径13.8㎝。包含層出土。169、170は坏身である。169は口縁を内傾外湾させ、端部を軽く面取りする。受け部に沈線が巡る。ロクロ回転は上から見て時計回り。外底に回転ヘラ削り、内面にナデを加える。包含層出土。170は169に比べて、口縁が長く直線的で、端部は丸い。ロクロ回転は上から見て逆時計回り。外底に回転ヘラ削り、内面にナデを加える。包含層出土。171は無蓋高坏の口縁部か。外面には沈線2条と櫛状施文具による列点文を施す。土坑SK－36出土。

172は土師器の椀である。高台は中心をはずれた位置に貼付している。体部外面には押し出し時についた指頭痕が、外底には板圧痕が残る。内面は器面があれているがヘラ磨きか。口縁内面にコテあ

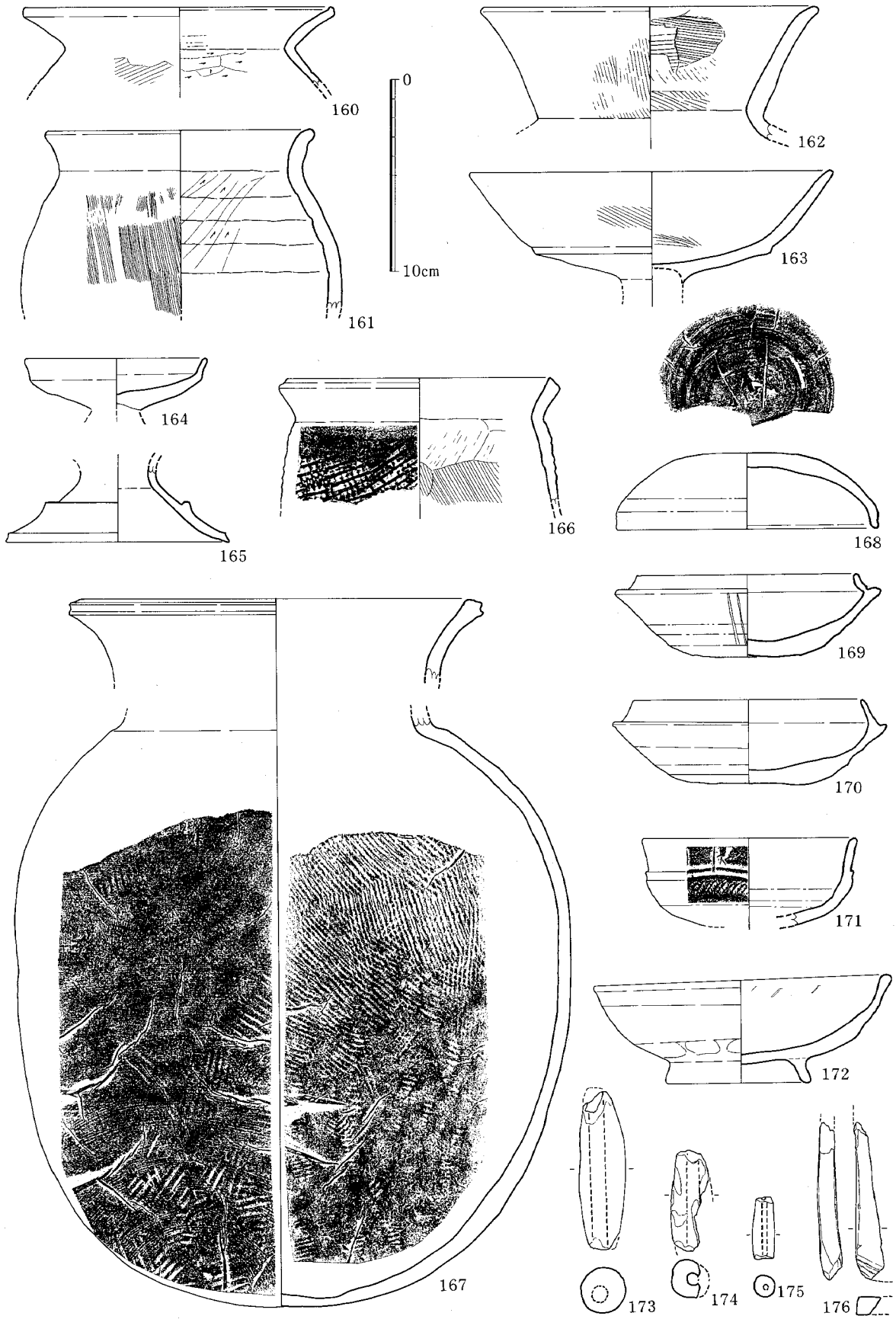


Fig.67　その他の出土遺物実測図（1/3）

て痕がのこる。口縁外面は横ナデしている。ピット出土。

173～175は土錘である。いずれも紡錘形を呈する。173、175は表土、174は土坑SK－27出土。

176は砥石片である。板状に薄い。ピット出土。

Ⅳ．おわりに

今回の調査では、古墳時代前期から鎌倉時代までにわたる遺構を検出しており、当遺跡が各時代を通じて生活適地であったことを示している。また、弥生時代中・後期の土器が出土することから、周辺に当該期の集落が存在するものと見られる。

出土した遺物は各遺構ごとに取り上げたが、遺物が移動しやすい砂地に立地することや調査のミスなどもあって、遺物に新旧の混在が多々見られた。遺構の時期決定に当たっては、最も新しい時期の遺物で判じたが、遺物量、遺存状態、破片の大きさなどを考えると、小片の土器については地下における移動、あるいは調査中の混乱による混入もあると考えた。また、出土した土器は、古い時期のものが量的に多く、新しい時期のものが少ないが、これは新しい時期の遺構に古い遺物が多量に入り込み、新しい時期の遺物が含まれない場合があることも示している。

以下、時代ごとに検出遺構と出土遺物をまとめたい。

弥生時代の遺構は検出できなかった。遺物は弥生時代中～後期の土器等が散見され、周辺の集落の存在を匂わせている。また、畿内系の凹線文を施した壺形土器が出土した。

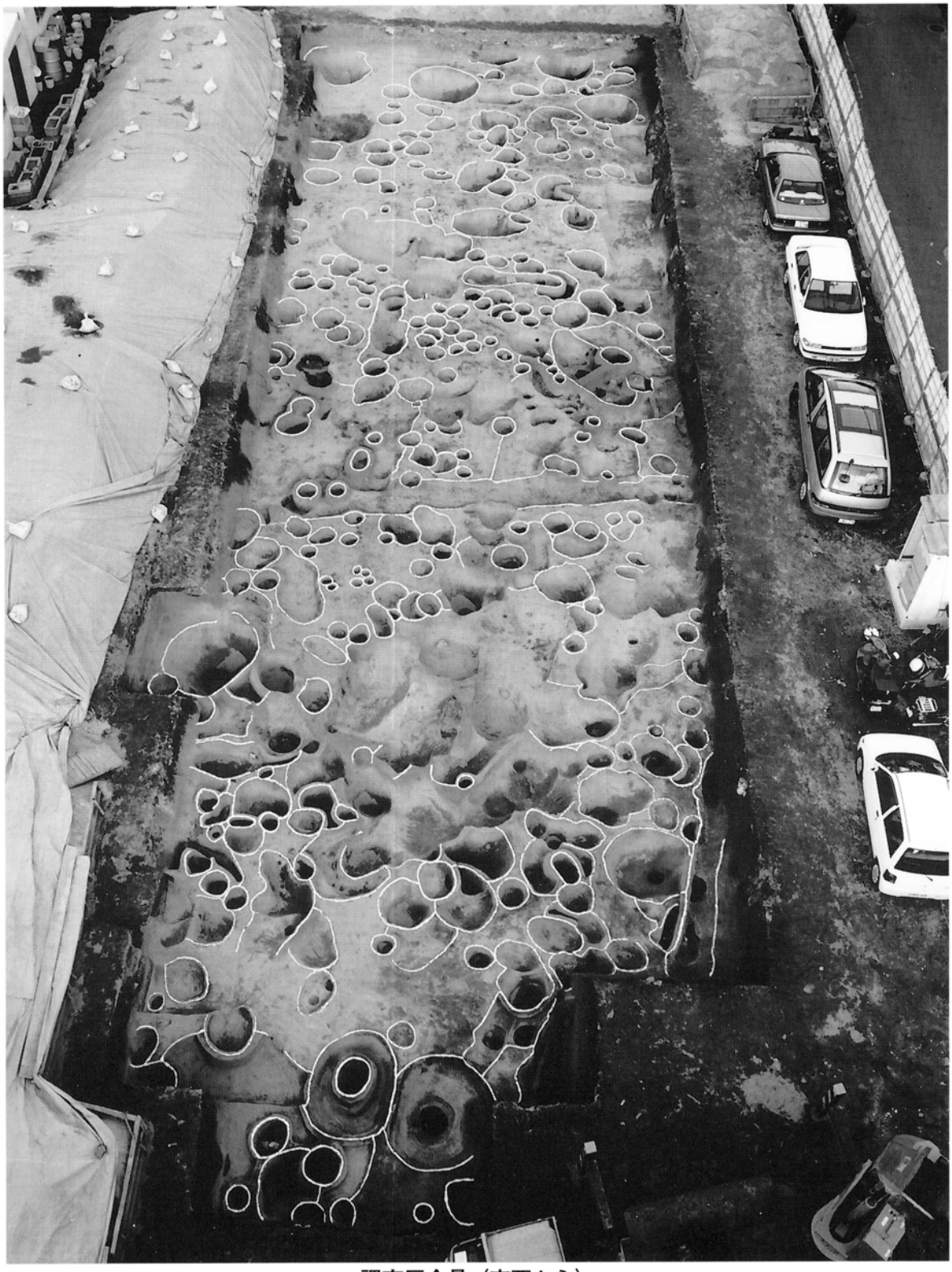
古墳時代前期と見られる遺構は竪穴住居跡１棟と少数の土坑のみである。しかし、この時期の古式土師器が、包含層も含め、古墳時代後期以降の各遺構に必ずと言っていいほど含まれており、量的には出土遺物の最多を占めている。検出遺構は少ないものの、遺跡としてのピークは、むしろこの時代にあったものと考えてよいであろう。

古墳時代後期の遺構は土坑を主体に多数検出した。当該期の遺物は古墳時代前期の遺物に次ぐ出土量がある。出土した須恵器は６世紀後半～７世紀前半の特徴を持ち、これに伴って、須恵器の形態・技法をまねた土師器が多量に出土した。この「赤焼土器」は玄界灘沿岸地域を中心に出土するもので、埋葬や祭祀的色彩の濃い遺構から出土する例が多く報告されており、また土器製塩との関連性も考えられている土器である。今回は海辺に近い集落跡と考えられる遺構から、甕形土器を中心に甑、鉢型土器などの器種が出土したが、叩き目に縄席文を用いたやや古相と思われる技法を持つものなどもあり、今後の検討を要する土器である。

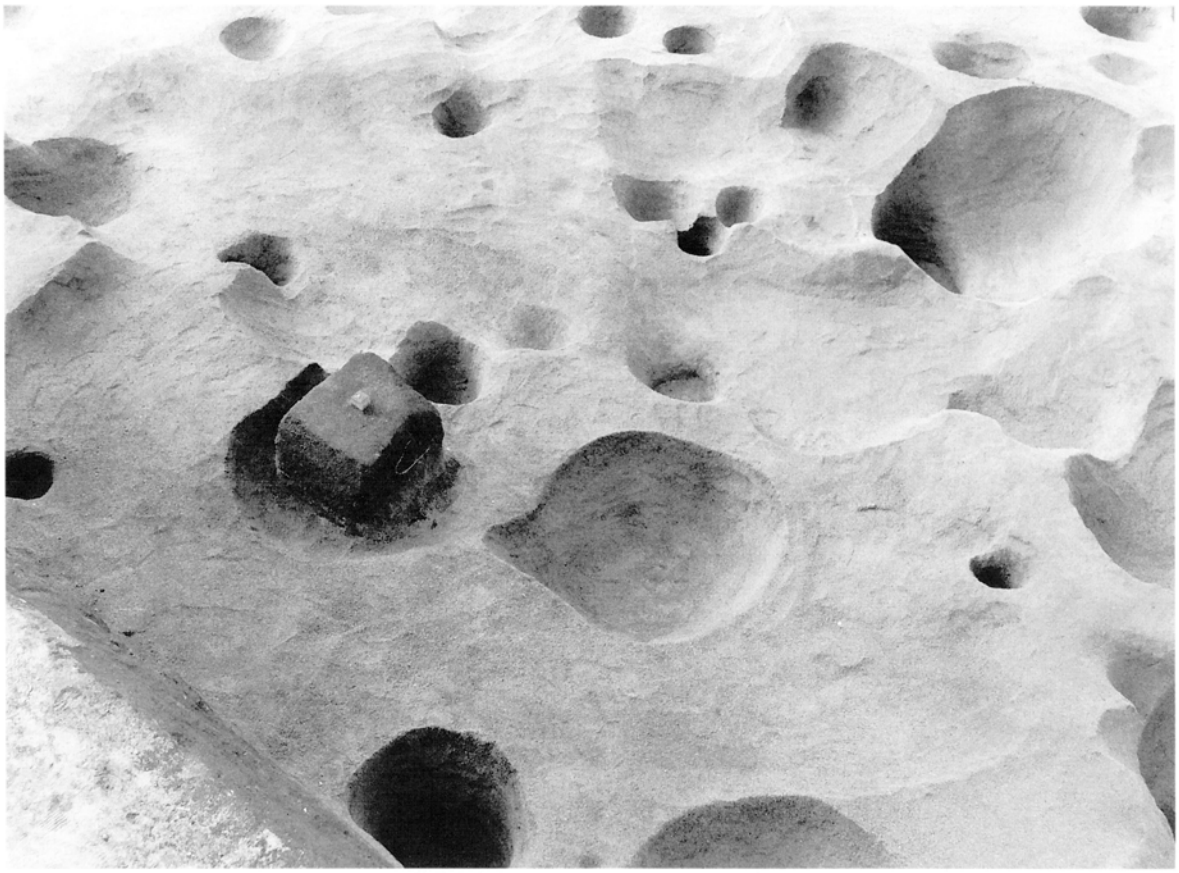
古代の遺構は掘立柱建物、竪穴状遺構（住居跡？）、井戸、土坑などを検出した。時期的には８世紀後半代を主体に、９世紀～11世紀までの遺物が散見されるが、量的にはさほど多くない。この時期には北側に隣接する堅粕遺跡群には公的性格を持った大規模な集落が形成されていたと見られており、当遺跡にはこれと関連する小規模の集落が形成されていたと考えられる。

中世の遺構は井戸を中心に検出した。遺物は土師器のほか、輸入陶磁器が数点出土したが、量的には貧弱である。これは北隣の堅粕遺跡群や吉塚本町遺跡においても同様に見られる現象であり、すでに堅粕遺跡群の報告書の中でも述べられているように、博多、箱崎という中世の２大貿易拠点である遺跡に挟まれた地域一帯が、中世においてどのような場として認識を受けていたのか、今後に解決すべき課題として残されている。

PLATES
(図　　版)



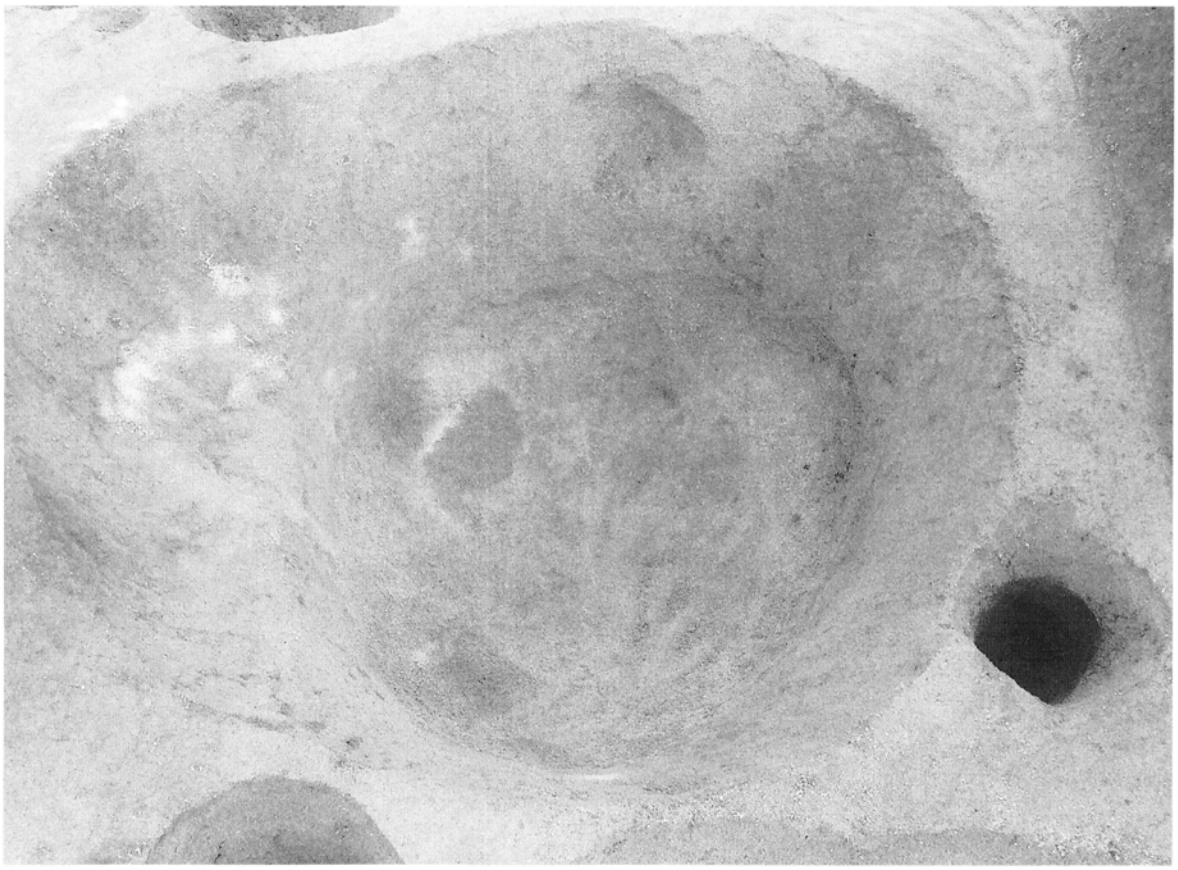
調査区全景（南西から）



1．竪穴住居跡ＳＣ－39（東から）

2．土坑ＳＫ－41（南から）

1．土坑ＳＫ－06（南から）



2．土坑ＳＫ－10（南西から）

1．竪穴状遺構ＳＣ－20（南東から）

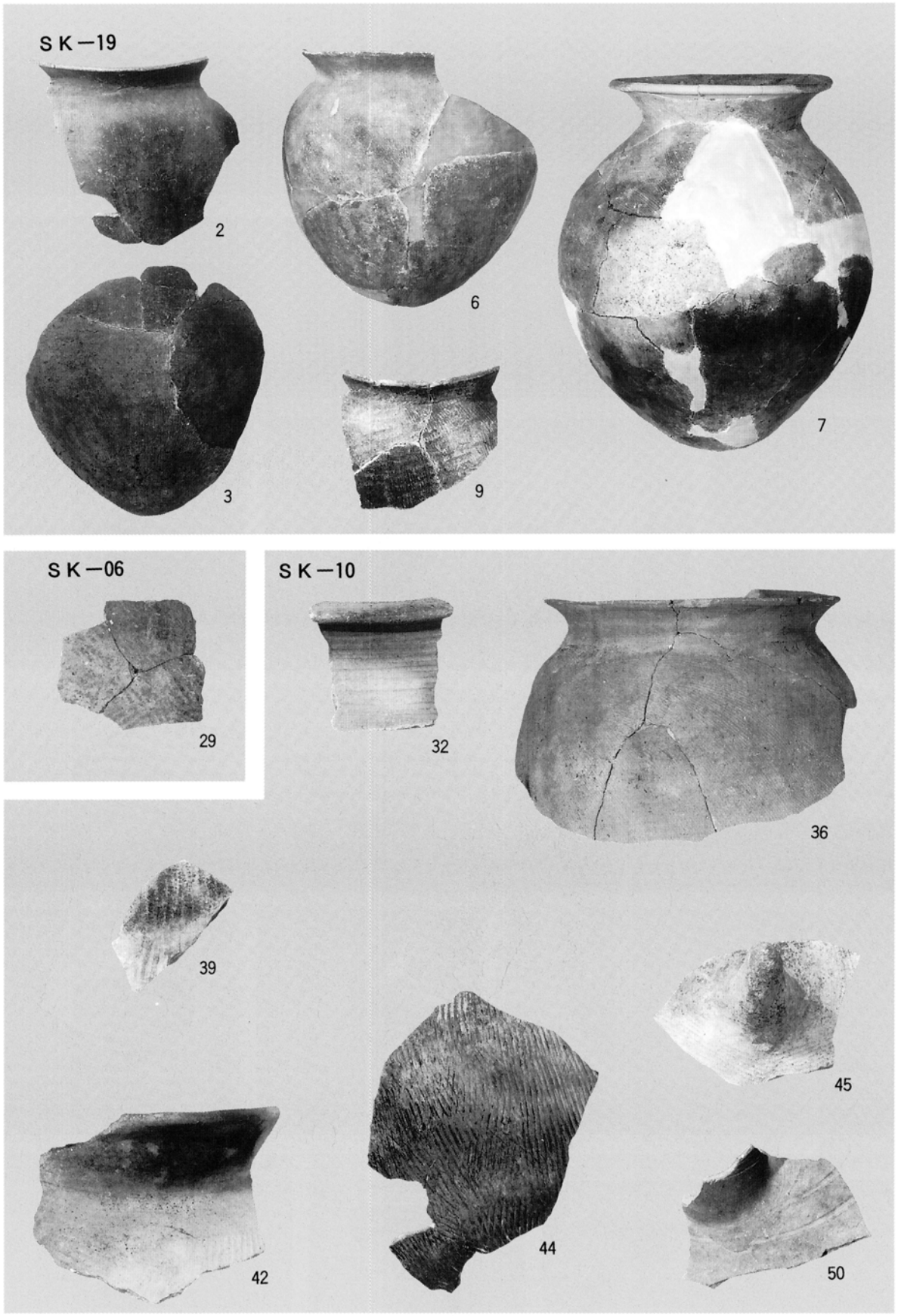
2．竪穴状遺構ＳＣ－25（北西から）

1．井戸ＳＥ－04（南西から）

2．井戸ＳＥ－30（南東から）

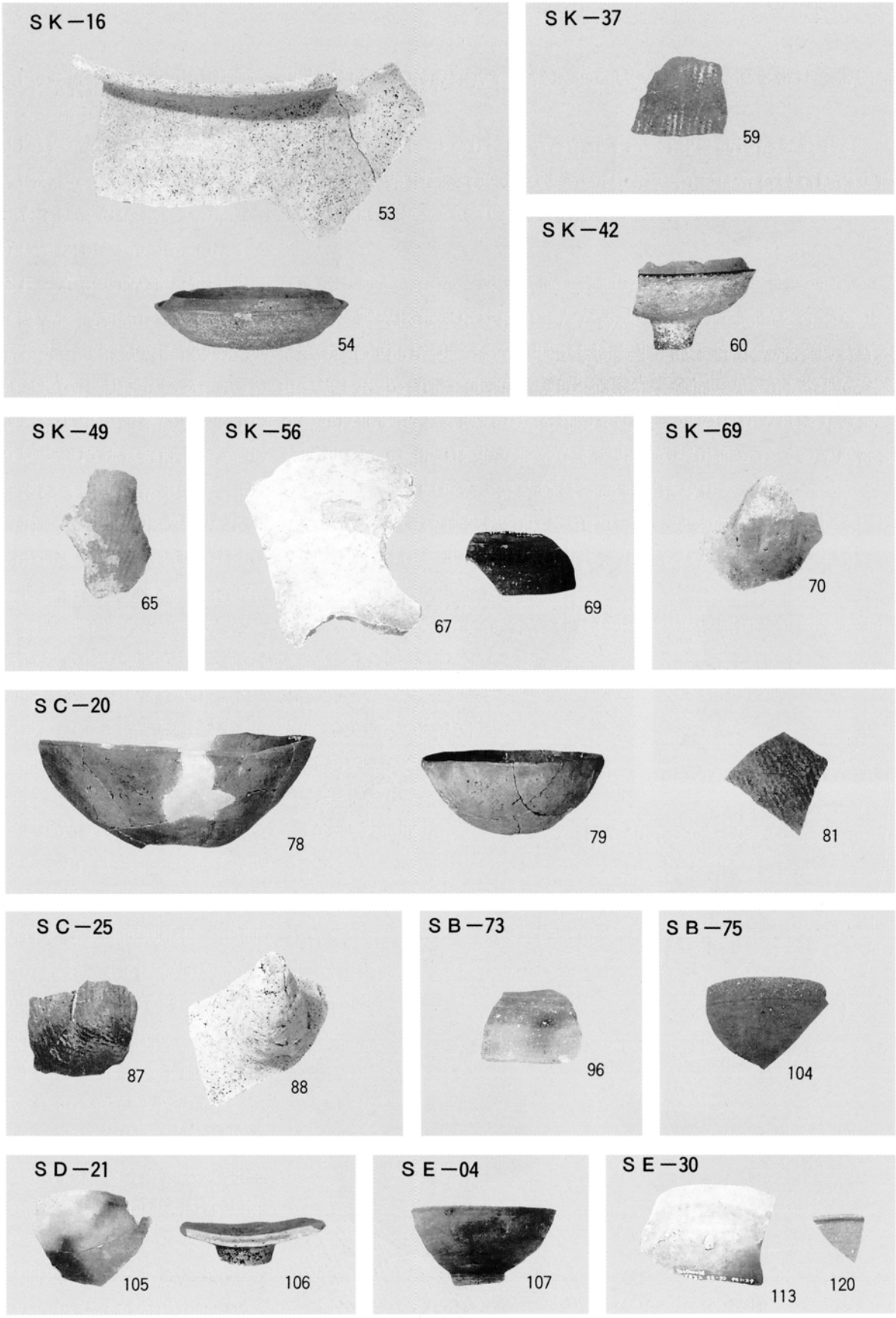
1．井戸ＳＥ－64、土坑ＳＫ－65（南から）

2．井戸ＳＥ－68（東から）

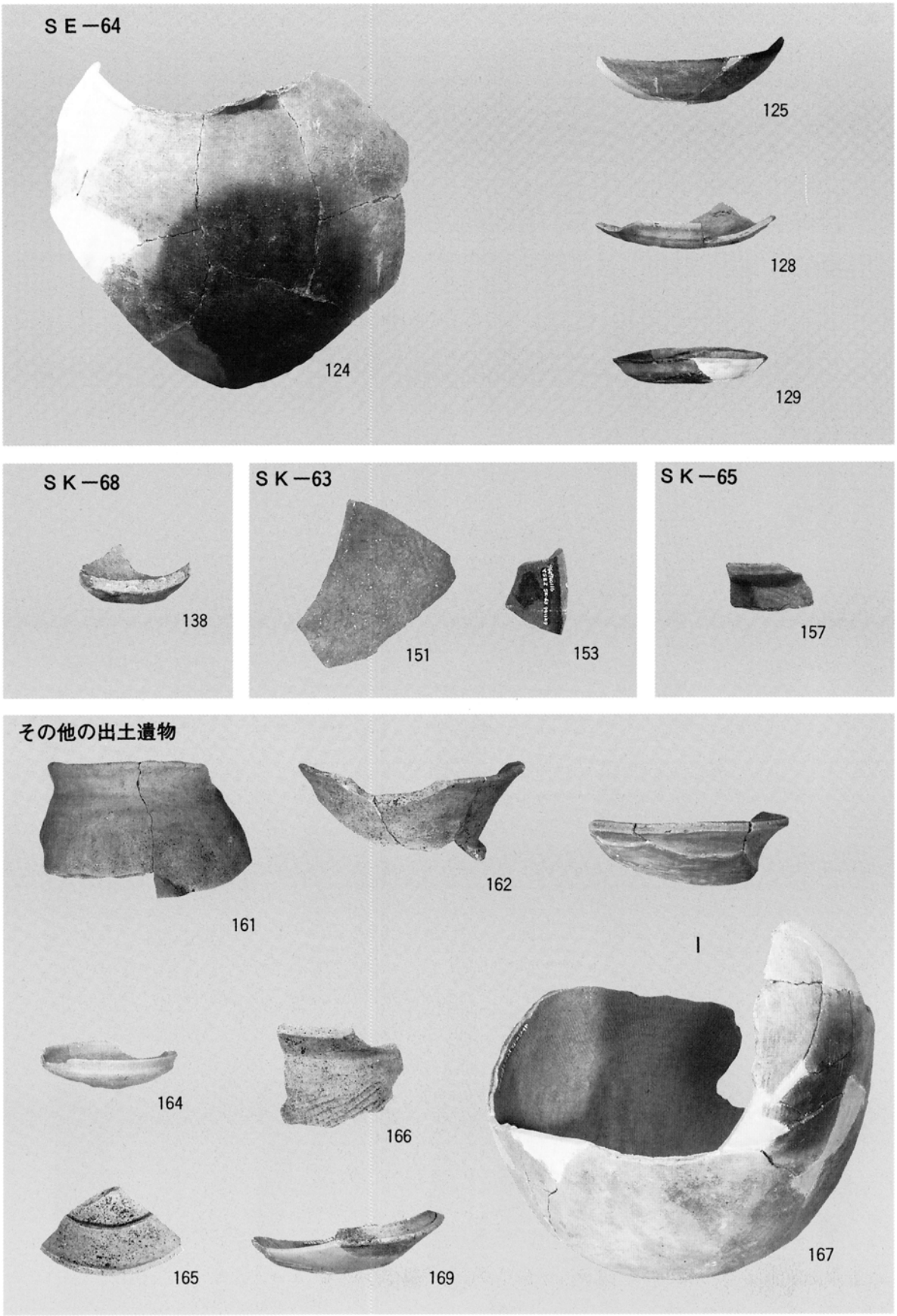


出土遺物・Ⅰ

PL. 8

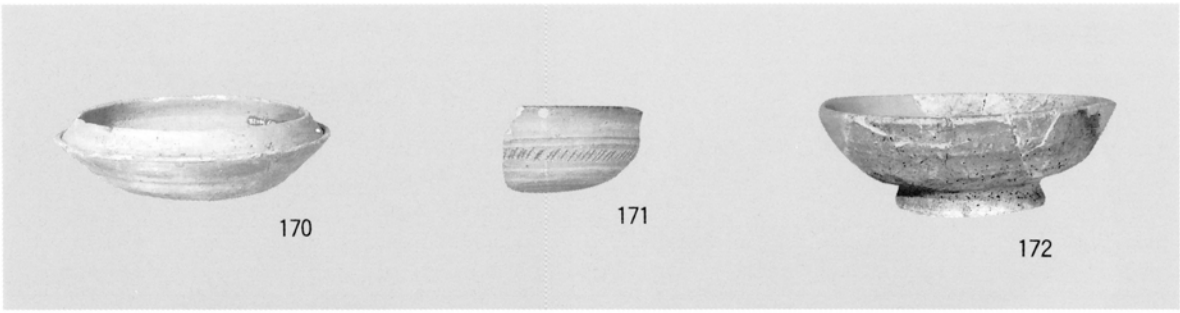

SK－16
53
54
SK－37
59
SK－42
60
SK－49
65
SK－56
67
69
SK－69
70
SC－20
78
79
81
SC－25
87
88
SB－73
96
SB－75
104
SD－21
105
106
SE－04
107
SE－30
113
120

出土遺物・Ⅱ

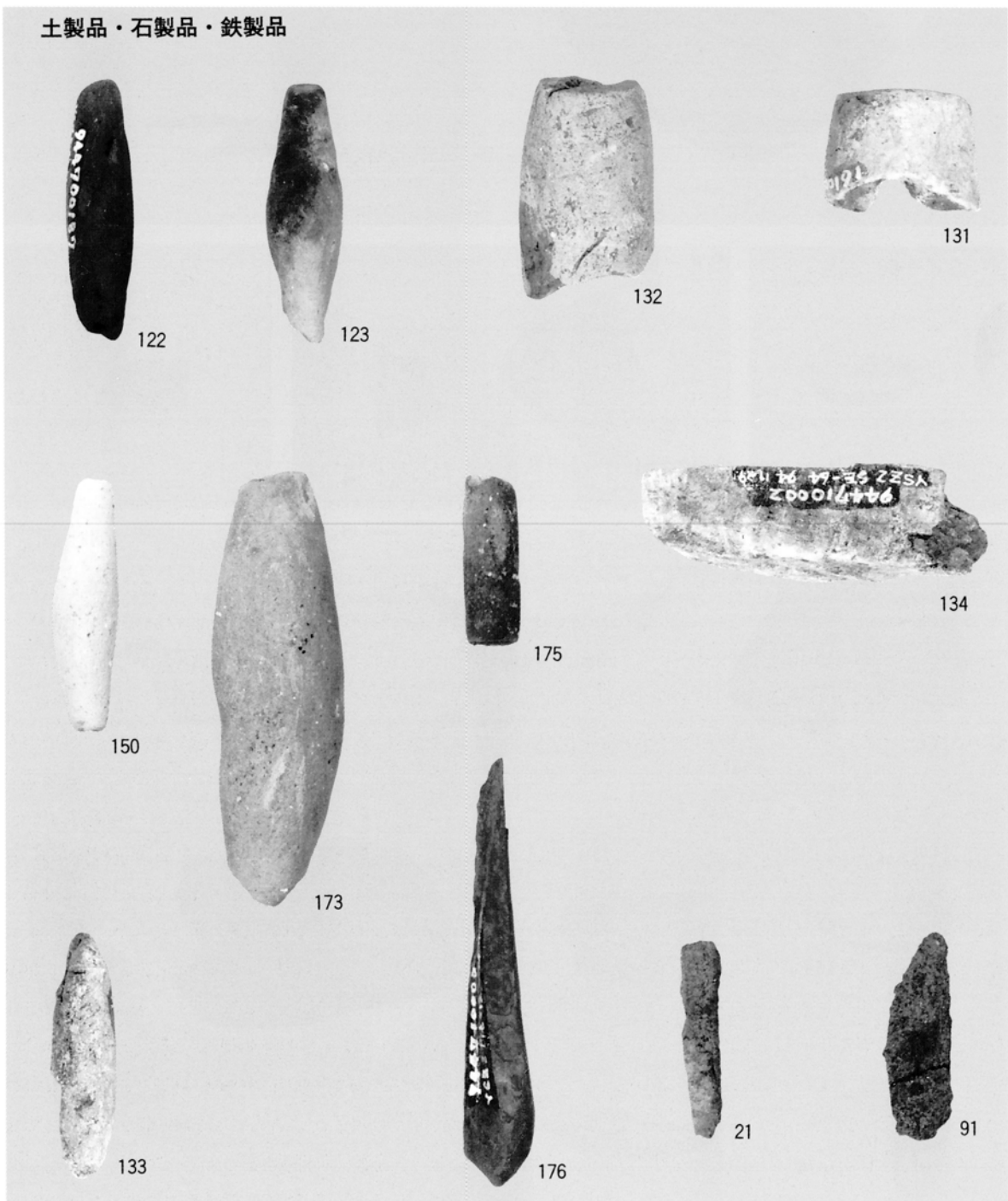

ＳＥ－64
124
125
128
129
ＳＫ－68
138
ＳＫ－63
151
153
ＳＫ－65
157
その他の出土遺物
161
162
164
166
165
169
I
167

出土遺物・Ⅲ

PL. 10



土製品・石製品・鉄製品



出土遺物・Ⅳ

吉塚 2

－吉塚遺跡群第２次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第464集

1996. 3. 31

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１丁目８－１

印刷 株式会社ミドリ印刷

福岡市博多区西月隈１丁目122－４